
世界に嫌われた女の子

chemical

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界に嫌われた女の子

【Nコード】

N5255Z

【作者名】

chemical

【あらすじ】

ハルがふつとばされた世界で出会ったのは、神と皇帝。女嫌いの皇帝と人を信じきれない少女のはた迷惑な恋物語。（リハビリのために、サイトにあるお話を少しずつ改訂していくことにしました。タイトルは同じですが、少しずつ内容は変わっていくと思われます。全部改訂しなおしたら、サイトに戻します。土日以外1日1回更新したいです。）

1（前書き）

不意に流血や痛いお話がありますのでご注意ください。
この改訂が終わったら、サイトを通常運転に戻したいです・・・

晴は不思議な子であった。

晴自身は当り前の事だと感じていたのだが。

周りの人には分からないものが、彼女には見え、聞こえ、触れられた。

けれど、晴はいつからか

自身に見えたこと、体験したことをあまり口に出してはいけなかったということも学んでいた。

それは、彼女の母親がいたからだ。

母親は精神的に弱っていた。

晴の言動一つ一つにひどく過敏に反応し、良いとは言えない反応を示す。

晴は子供の動物的な本能で感じ取っていた。

物心ついた時には彼女の母はすでにそういった精神状態であったし時折、気まぐれのように示される愛情も

言葉の暴力を投げかけるときでさえも晴にとっては母という存在以外の何者でもなかった。

母のその状態は彼女が生まれる少し前に他界した父親の事故のせいでもあったかもしれないが、

彼女もまた敏い人であったから晴の異常さに怯えていたのかもしれない。

母親は晴の不思議な言動を子供の言うことだから、と受け流すことをせず

罵りに変えて吐き出していった。

まだ、言葉の暴力だけだっただけ、まだだと思うかもしれない。

晴自身は、幼すぎてそのころの生活を思い出すことも難しいが

母と子、2人の生活の中で、大きな影響をもつ存在からの否定は

彼女を内向的にするには十分だった。

内向的になった彼女を、支えてくれたのは母ではなく、人でもなかった。

そうして、その交流を母に知られることでまた母の精神も削られていった。

悪循環というのだろうか。

繰り返される言葉の暴力と堂々巡りに晴は黙って耐えることしかできず、

彼女は母親の前であまり喋らず、行動しない子になっていった。

だが、晴には逃げ場所ができた。

それは、彼女にとってとても幸運なことであつたといえるだろう。

子供というものには考え方、感じ方の見本が必要であり、一番の身近な手本が保護者だ。

それをなくしては精神の成育はうまく成り立たない。

晴にもそれは例外ではなく、事実その状態のままであれば

彼女の今の状態はなかっただろうと容易に想像がつくというものだ。彼女が世間一般的に見ていい子に育つたのは彼女の母方の祖父母のおかげに他ならない。

彼らは、年に一度は顔を見せに来ていた孫と娘が訪ねてこないことに疑問を抱き

母親と晴を訪ねた時、彼らはその異常に敏く気が付いた。

それだけではなく、彼らは彼女の母親が精神的に弱っている状態にあるということや

母の晴への接し方を知ったときに素早い対応をしたのだ。

もしかしたら、祖父母も薄々自分たちの娘の精神状態を疑っていたのかもしれない。

彼らは世間や周りの目を気にすることなく

母親を病院に無理矢理入院させ、晴を自分たちが住んでいる田舎へと引き取ったのだった。

祖父母に連れられて田舎へと行った晴は

その小さな目に、収まりきらない世界を見た。

怯えた小動物のようなビクつきは消え、青白かった頬には赤みがさし子供らしい柔軟性と順応性で欠けていた様々なものを取り戻したよ

うに見えた。

彼女の顔には表情が戻り、毎日近くの野山を駆け回ることを楽しみにする普通の子供になっていった。

彼女自身の周りには相変わらず、不思議な出来事が多かったが田舎特有の空気と、風土に紛れ込む程度のことだった。

けれども、晴は不思議なことは祖父母の前でしか語らなくなっていた。

幼かったとはいえ、母親の怯えや嫌悪の表情からそういった事柄を忌むべきことと認識していたからだろう。

他の人間には友人であつたとしても曖昧に誤魔化していたが一緒に生活を営んでいる祖父母にはさすがに通用しなかった。

初めのころは、祖父母に対しても怯えながら話していたが

母親の代わりに彼女を愛しんでくれていた祖父母は、晴の話を聞いても母のような反応は一切見せず。

笑って頷いてくれたり、ときには真剣な顔で注意を促したりした。

祖父母は晴がほかの子と違うことに恐怖は覚えていないようだった。いや、本当は彼らも晴に恐怖を覚えていたかもしれない、

ただ、その感情を決して晴には悟らせないようにしていたのかもしれない。

祖父母は、普通の子と同じようにやってはいけないこと、危ないと思われるようなことは

晴に厳しく言い含めたし、他の子らと同じように叱りつけた。

晴が不思議なことを体験した時は

幼い子供は神様の子だからね。と、優しく頭をなでてくれていた。

それは一度壊されかけた晴の世界を壊さないものであり、とても居心地が良かった。

そんな日々が続いていたのに。
晴の7歳の誕生日にひとつの悲劇が彼女を襲った。

その場所に決しているはずがない彼女の母親が、彼女の前に現われたのだ。

精神的に弱っている彼女の母親は祖父母の手配した病院に入院しているはずで、

その病院はここからとても離れているというのに、
母親はそこにいた。

入院患者の着ているような服ではなく、以前見ていた普段の服装のまままで

庭先に立つ彼女は、晴を見つけてゆっくりと微笑んだ。

そのとき祖父母は、晴の誕生日の御馳走のために1時間かけて隣の市の大きいスーパーに行くと言った。

祖父母の帰りを楽しみに待ちつつ庭で遊んでいた晴の目の前に立った母親。

その世間的にとっても美しい部類に入るその顔は、別れた時と比べると変わっていなかった。

晴のものは違い黒曜石のような髪と瞳をもつ彼女が、
静かにたたえた微笑みは、見る者に優しさを感じさせるには十分だった。

「晴」

呼びかけられたその声に、晴は思わず母親に飛びついていた。

足がもつれるような勢いであつたが、母はしっかりと晴を抱きしめてくれた。

いくら傷つけられたとしても、いくら罵倒されようとも

彼女は晴の母親であり晴の大好きな人なのだ。

物心ついてから晴が知る母は、時折気まぐれに愛情のようなものを示す人だったが

そんな偏った情を与えてくれる彼女でも、母親という晴の狭い世界

の中心だった。

そんな彼女が、笑顔で腕を広げ

晴を包み込むように抱きしめてくれたことは

その時の晴には誕生日よりもうれしいことであつた。

母親には1年ほどあつてはいなかったが、

こんな微笑みで晴を呼ぶ彼女はもう、弱っていた精神が回復し退院してきたのかと思わせるほどで。

「おかあさん！おかあさん！・・・」

泣きながらしがみついてくる我が子をやさしく抱きしめながら、縁側から彼女は娘を家の中へと誘導する。

その顔には変わらず、微笑みを浮かべたままで。

「晴、ずいぶん大きくなったのね・・・」

頭をなでながら優しく、泣きじゃくる娘に語りかける。

一瞬、声の中に暗いものが奔つたことに

泣いていた晴は気がつかなかった。

けれど、それきり何も言わない母親に

晴は顔をあげ、母親を見上げた。

涙でかすんでいたが彼女の母親はさつきと同じ微笑みのまま。

そこで、晴は妙な違和感に取りつかれた。

こんな顔を母親は一度でも見せたことがあつただろうか。

時折見せてくれた愛情の中、こんなに手放しの微笑みはあつただろうか。

母親はいつも、少し怯えが見える顔で

それでも精一杯微笑んで晴を見つめてはいなかったか。

張り付いたように動かない母親の顔を、晴は思わずじっと見つめてしまっていた。

変わらない。優しい笑顔。晴が見たことがないくらいの。

変わらない表情に、どこからだろうか

晴の中に恐怖がぼつりと広がった。

晴は染みのように広がる本能のままに、母親から後退る。

畳で、晴の膝が少し痛いくらいに擦れてしまったが
それを気にする余裕はなかった。

母親は変わらない微笑みで彼女を見る。

「どうしたの・・・？」

微笑みは変わらない。

変わらない。

変わらない。

「やだっ！」

晴は怖くなって逃げ出そうとした。何が、とかなんてとか、理由は
分からなかったけれど
とにかく逃げることしか考えられなかった。

恐怖に背を押されるように部屋を飛び出そうとして後ろを向いた彼
女の首に細い、
ひものようなものがしゅるりと巻かれる。

それが何かを確認する間もないまま、ものすごい力で絞められた。

「な・・・」

疑問を声に出そうとしても首が絞められているために声にならない。

だが、苦しそうな晴をみながら母親は静かに言った。

彼女の首を絞める動作には何の躊躇もないまま力を込めて。

「大きくなるからよ。晴が、私のちいさな子のままでいないから。
こうやって、もう一度晴は小さくなるの、小さくなって

あのころに戻ってもう一度3人でやり直しましょうね」

精神が病んでいるからか、晴にも理解できない。

言葉の意味を考える間もなく、晴の意識は闇に落ちた。

晴の中を駆け巡ったのは、母親に対しての疑問や怒りではなく
生きることへの欲求

ただ、死にたくなかった。

次に目が覚めたとき、彼女は無機質な白が囲む部屋にいた。

そこには祖父母が泣きながら彼女が目覚めるのを待っていて
晴の名前をずっと呼びながら、よかった、ごめんね、しなくてよ
かった。

そう何度も何度もかけられる声と彼らの涙に
彼女の記憶にあることが現実起こったことなのだと実感させられ、
それが悲しくて晴は思い切り泣いた。

悲しいのは、母親にそこまで嫌われていた事実だった。

なんとなく、自分が生きているからには母親は死んだのだろう。

と妙な確信が彼女のなかにはあった。

受け入れたくない記憶を、無理やり認めさせるかのような祖父母の
泣き声に

晴は、その記憶から逃避することもできず

ただ、本当にあったこととして刻みつけられたのだった。

大分大きくなってからだったが、祖父母に教えてもらったことによ

ると、

母親は欄間にロープをかけて首をつっていたらしい。

そばには彼女の字で“晴をあたしから守って”という走り書きのメモも見つかった。

晴は自分では首を絞められてずっと気絶していた

と思っていたのだが、祖父母の話によると醜く変わった母親のそばでぼんやりと母親を見上げていたらしい。

祖父母が声をかけると、けいれんを起こして倒れ、そのままあの病院に担ぎ込まれたということだった。

医師が晴を診察して初めて、首にひもが巻かれ尋常でない圧力で絞められた事実が明らかになったという。

いくつかの組織はひどく傷ついていたが運良く重要な器官や声帯に損傷は見られず

絞痕に比べると医師も首をかしげるほどの軽傷だったらしい。

その後も、なんだかんだと問題はあったものの、晴は順調に成長していった。

ただ、なぜか人よりもとても成長が遅かった。

小学校6年生でも3年生ほどに見えたり、中学生になっても小学生と間違えられる容姿のままだった。

だが、そのことで彼女がいじめられたりすることはなかった。

からかわれることはよくあったが、彼女は事実を否定はしなかったし逆に言い返すこともしていた。

ひとえに彼女が、小柄ながら運動神経が抜群によく

小学生のころから誰一人彼女に喧嘩で勝てる者がいなかったということも

いじめられなかった理由の一つだろう。

広くて狭い田舎では、晴の祖父母が有名なサーカス出身ということ

が知れ渡っていたため、

彼女の運動神経を誰も不思議には思わなかった。

上級生も、彼女には一目置いていたし、

何より頭の回転が速く運動が抜群という彼女自身が

人に嫌われるような性格ではなかったという所が大きいだろう。

もしかしたら、知らず知らずのうちに頻繁に彼女の周りで起こる出来事によって、

周りの人間たちの同情を得ていたのかもしれない。

少なくとも晴はそう思っていた。

それなりに、晴は幸せな生活を送っていたが、14歳の時に彼女の祖父が突然他界した。

高齢であったのもそうだが、不幸な事故だった。

おしどり夫婦と評判高かった祖母も、祖父の他界から体調を崩し、晴が15歳の時に亡くなった。最後まで晴を気にかけてくれていた。早過ぎる、二人の死はとても悲しかったが

周りの助けと、祖父母の遺してくれた

これから生活していくのには困らないだけの遺産、生命保険によるお金、更にはよく知る弁護士のおじさんが後見人になってくれるという、

祖父母の温かい庇護は祖父母がいなくなっても晴を守ってくれていた。

そうして16歳になった晴は祖父母の家で一人暮らしながら高校生を送っている。

「いつてきます」

写真の中の祖父母にいつものように挨拶をして、彼女は学校に行くために家を出る。

なぜだろうか、彼女の親しい人たちはたとえ生身の姿ではなくなっただとしても

彼女の前に姿を現すことがなかった。

常ならざるモノたちを見、交流することができず晴の不思議も依然として幼いころのまま残っているというのに。

もしかしたら、姿を現すことで晴があちら側に飛び込むとも考えているのかもしれない。

それもいいかもしれないと、本当に時々考えてしまう。

庭の隅でさわさわとうごめくモノたちに恐怖を感じることもなく、逆に親近感さえわいてしまうのだから。

そんなことを考えながら、晴は門の脇に寄せていた自転車に鞆を降りこみ

田舎の一本道を自転車で駅まで向かった。

その駅から4つはなれた駅の近くに晴の通う高校があるのだ。

途中、朝からだだっ広い畑で農作業中の近所のおばさんたちと会い、いつものように挨拶をする

一人のおばさんが手に持っていた籠の中から黒いこぶし大の物を投げてきた。

晴がそれを軽く片手で受け止めると、おばちゃんは笑った。

「晴ちゃん！いまから学校かい？おばちゃんの特製焼肉おにぎりだよ！もっていきな！」

「危ない人には気をつけるんだよ！」

「知らない人についていつちやいけないよ!!」

「ほら、ジューズも持って行きなさい」

晴に次々とおばちゃんたちから物が投げられる。さすがにするめいかは朝からちよつと重いけれど。

みんな、晴が幼いころからの近所さん達で

晴の祖父母が亡くなったときから、まるで親のように晴を怒り、心配してくれている人たちだった。

彼らは、晴に会うといつも食べ物を与える。

金銭的には困ってはいないのだが、そういった食べ物は晴にとってとても助かるものだった。

晴は、料理があまり得意ではないからだ。

何しろど田舎なのでコンビニも少ないし、

スーパーの惣菜も夕方の割引を狙っているご老人たちやおば様たちにかかれば

晴が学校から帰ってきたころには微妙なモノしか残っていない。

「ほら、あんまりばさつとしてると電車で遅れちゃうよ！」

くれぐれも、暗い路地には入らないようにね」

いつものようにお菓子やらジューズやらをもらって、

高校生な自分にはちよつと過保護すぎる言葉をもらってと、いつも通りの朝だった。

「ありがとう!! 行ってきます!!」

そう言つて、もらったもの達を鞆に急いで詰め込んだ。

腕の時計を見ると、少し急がなければならぬ時間になっている。

おばさんたちに笑顔で手を振ると、自転車に飛び乗り

そのまま黙々と自転車をこぐ。

朝の少し冷えた風が心地よく、通り抜けて行つた。

数分自転車をこぎ続けていると、田畑が少なくなり段々と車通りが多くなる。

駅前の繁華街が近づいてきたのだ。

繁華街といつても住民が買い物をする商店街と

全国チェーンのファストフード店が一軒あるだけのもの。

けれども国道はそれなりに交通量が多く、ちらほらと小学生が近所の小学校に登校している姿も見える。

国道沿いに駅へと向かっていた晴は、視界の端に黄色い帽子がぴよこんと動くのを見た。

無意識に眼で追ってしまった晴が次の瞬間に見たものは

目の前の国道に黄色い帽子を被った男の子が飛び出すところだった。
「あぶない!!」

叫んだが、自転車に乗ったままの晴の声は少年まで届かなかった。
物を落つことしたらしく、少年は下しか見ていない。

けれど、少年が飛び出した道にはトラックが迫っていた。

大きな音を鳴らすトラックに、少年は逃げるのではなくびくりと体を硬直させた。

とつさに晴は自転車から飛び降りて、走った。

「っ……!!」

間に合うかギリギリのところだ。

持前の運動神経で体勢を崩すことなく自転車から道路に着地し、男の子を抱き上げると同時に男の子を歩道側へと放りなげる。

いつも通っている道だから、勘でしかないが

確か少年を投げた方向にはゴミの山があつたはずだった。

なくても、トラックにぶつかるよりはましだろう。

だって、少年を抱えたまま反対車線に出ても別の車にひかれてしまう。

そこまでは頭と手が回ったのだが、

少年を投げた後自分がどうなるかなんて考えてなかった。

ブレーキ音、悲鳴、衝撃

奇妙な浮遊感。

晴が覚えているのはそこまでだった。

死にたくないな。

そう、ずっと昔と同じことを思った。

思えば結構悲惨な人生だったのかと思う。

自分としてはとても幸せだったのだけれど、客観的に見て自分は悲しい人生を

歩んできたのではないだろうか、不思議なものが見え、母親に殺されかけ、

祖父母は早く亡くなり、その他、周りの人たちから心配されるほど、いろんな事件に巻き込まれてきた。

そうして、自分は子供を助けてトラックにふつとばされる。

・・・考えても典型的とまではいかないが、悲惨な人生だ。

「あー、まあ本人が満足してるだけでいいかなあ」

お、声が出た。自分はてつきり死んだと思っていたのに。

「あ、死後の世界だから自分のどうとでもなるのかな？」

首をかしげる。実際生きているのならトラックにあたったからには少なくとも骨折や、怪我をしているはずで、その痛みがあるはずだけれども今、自分の体には全く痛みも傷もない。

と、ここまで考えて気がついた。

「ここどこ・・・？」

ほのかに白く明るい夢の中のような場所。

ここが死んだ人が来る場所なんだろうか？

てつきり、すぐに幽霊にでもなるかと思っていたのだが、

意外に、未練とかがなかったのだろうか。

「違うわよ。 ハル」

聞こえてきた声が、空間を切り裂いたように晴の耳に届いた。

「ここで会うのは久しぶりね。 まあ、もう元の世界には戻れないけ

ど」

傷の具合はどう？

とにこやかにほほ笑みながら、声と同じくいきなりその人は現れた。真っ黒な瞳と豊かにうねる髪を背中に流し、

白い布で挑戦的な体の覆い方をしている。ないすばでーのお姉さんだ。

ちなみに背中には真っ白な翼があった。

天使のような恰好のその人を見あげて
晴は、言葉を失った。

いきなりファンタジーな恰好をした天使っぽい人が現れたからではない、

その人が、日本でこんな恰好をしていたら捕まりそうだなと思ったからでもない

いきなり現れたその人の顔に、だ。

黒曜石のようにまっ黒な瞳と髪の毛

大きな目と少し厚めの唇。とても整ったその顔は

――母親のものだった。

「あ・・・お・・・かあさ・・・？」

目の前の者は母親に瓜二つであった。

混乱する。

自分の頭がおかしくなったんじゃないだろうか。

ふいに、過去の網膜に焼きつけられた映像が、頭の中を掠める。

だってお母さんは・・・ゆれていなかっただろうか・・・？

忌まわしい記憶の中の映像に心臓と体の言うことが聞かなくなる。

耳元で、うるさいくらい心臓の音が聞こえた。

かは、と肺から小さく空気が漏れる。

息ができない。

息を吸おうとしているはずの肺が、筋肉が働きを止めたかのようなまるで昔の無声映画のように、目の前で切り替わる映像のことしか考えられない。

「ストップ。落ち着きなさい！ ハル」

突然の女の人の声に、どうしてか晴の思考がはつきりとクリアになった。

無声映画のような映像は瞬く間に視界から消え、緊張していた体が自由になる。

胸を押さえていた手も、制服も汗で湿っていた。

片手を床につけ、必死で酸素を肺に入れるため息を吸い込む。

息を整えながら、ここまで動揺してしまうものなのか、と頭の冷静な部分で考えた。

まだ、囚われている。

母親に。

息を整える晴の前に、母親と瓜二つの女性は膝をつく。

気配に、晴が顔をあげると

女性は晴の肩にそっと、まるで愛しむように手を触れた。

「正確に言えば、あたしはあなたの母親ではないわ。

母親のような存在ではあるし、そっくりなのも認めるけれど。

——落ち着きなさい。あなたは死んでないわ」

もう一度、言い聞かすようにゆっくりと言われた言葉は案外すんと晴の心の中に落ちてきた。

「あなたは・・・だれですか？　ここは・・・？」

絞り出すように言った言葉は、震えているけれどきちんと声にすることができた。

何のひねりも芸もない言葉だが、一番知りたいのだからしょうがない。

晴の中に冷静さはいくらか戻ってきたようだった。

女の人は笑って晴と同じようにその場に座り込み晴の目をのぞきこんできた。

とても怖かったが

さっきの自分に負けなくなかったから、晴は無理やり目を合わせ続ける。

そこにあっただのは意志のはっきりとした黒い瞳。強い生命力にあふれた瞳だった。

そう、あの人はこんな目をしなかった。

あの人の目はいつも違つところを見ていて、覗くとどこか暗い処に引き込まれそうになる。

そんな瞳をしていた。

この人と、彼女は違うモノだと

感覚で理解すると、晴の中に落ち着きと冷静さが一気にすべて戻ってきた。

女の人の目がやさしくなる。

そこには彼女には無かった、晴への純粹な愛情があった。

祖父母の笑顔を思い出すような、そんな視線だった。

見ず知らずの彼女から、そんな感情を向けられることに少し混乱しつつ

晴は彼女が口を開くのを待った。

「ハル。ここはね、あなたがいた世界と違う神々が治める世界。あたしはその中の一人。リルヴァーナ。

あなたは元の世界では事故にあつて、いなくなったことになつてゐる」

言われていることは無茶苦茶なのに、どうしても真実だとわかつてしまふ。

真実だと理解してしまうことがおかしいのかもしれないが、晴は、この人の言葉に嘘はないと信じてしまっている。

この人には、そうせざるを得ない圧力がある。

世界が違ふとか、普通に考えてもおかしいことだ。

いくら、普通の人には見えないモノたちを見てきたとはいえ晴は疑り深いほうだ。

神はまだいい。日本にはそれこそ多くの神々がいて私もその存在を幼いころから疑つてはいない。

神と呼んでもいいのかわからないものたちも多くいるが神と呼ばれる存在はどことなくキラキラとしているのだ。

この女の人、リルヴァーナもそう。

時折目を細めてしまふほど、眩しい。

昔からの不思議現象のせいでこういう事態に慣れてしまったのか。どちらにしても一応は納得するしかないだろう。

今の晴が疑いを持つても、あまり意味がない。

万が一夢の中だとしても、だれにも迷惑をかけていないのでセーフだ。

「私は、元の世界に戻りたいです」

戻れないとさつき聞いたような気がするが、聞いてみなくちゃ分からないだろう。

ここが夢であろうとどこだろうと、私が生まれた所はあそこなのだ

から。

私の言葉に、リルヴァーナは少し厳しい顔をしていった。

「あちらの世界の神々はあなたを手放すことに決めたわ。もう、戻れないの」

ごめんね、と

いつの間にか握られていた手を強くつかまれて泣きそうな顔で言われては、

根っこが馬鹿なくらいお人好しだといわれる晴に勝ち目はなかった。リルヴァーナが言った、晴を手放すとはどういうことなのだろうか。

「つまり、あつちの神様・・・？ 仏様とかキリストとかに私が嫌われたということですか？」

推測を言葉に出してみても、首をひねる。

神様に嫌われるって・・・なんか悪いことをしただろうか？

そんなに悪いことをした覚えはないはずんだけど・・・と、難しい表情で考える晴にリルヴァーナは焦っていった。

「嫌われたんじゃないの！むしろ好かれたからこっちにいるのよ！あのね・・・あつちの世界とあなたの相性はものすごく悪かったの。神々は何とか助けようとあなたを一度こっちに飛ばして相性の修正を図ったんだけど・・・」

結果は・・・運の悪さからもわかるとおり、ね。

だから、お気に入りのあなたを死なせたくないから、

相性のいいこっちの世界に泣く泣く手放すことに決めたのよ」

必死な言葉から嘘はないと感じられて、それはそれで悲しくなった。

神様に言われるくらい
やっぱり、私ものすごく運が悪かったんだ…。

そんな気はしていたが改めて言われるととても悲しくなってくる。
確かに、神様に嫌われているような気はしなかった。

助けようとしてくれるまで好かれていたのも知らなかったのだが。
けれども、神様に助けてもらっていたというのにあんな運の悪さだったのならば

確かに世界と相性が悪いというしかないだろう。
生きているだけましというものだ。

トラックに吹っ飛ばされて、いきなり変なところにきて
神様に会って、世界と相性が悪かった・・・ってどれだけ現実離れ
しているんだろうか。

今の状況が夢でも一向に構わないし、むしろそのほうが嬉しいのだが
こっそりとつねった頬は痛いし、脳味噌以外の感覚が現実だと示し
ている。

戻れないと言っていた。

元の世界に戻れないとなると、もう、友人にも近所の人たちにも会
えなくなるということだ。

脳が考えるのを拒否しているのか
ふわふわとした現実感のない、悲しさがどんどん膨らんできて、勝
手に涙まで出てきた。

「う・・・」

目の前がゆがむ。

頬を、温かいものが流れていく。

泣き始めた晴をリルヴァーナは優しく抱きしめて頭をなでてくれた。リルヴァーナのその手がまるで、お母さんのようで遠い遠い、昔の記憶が少し開いたのかもしれない。

悲しみだけではなく、既視感に後押しされて涙はどんどん流れていた。

泣き続ける晴にリルヴァーナは何も言わずにずっと頭をなで続けてくれる。

どれくらい泣いていたのかわからない。

これから自分がどうなってしまうのか、どうやって生きていけばいいのか

全くわからないまま、晴はリルヴァーナの腕の中で泣きつかれて眠ってしまった。

5 (前書き)

皇帝視点です。

政務も終わって、汗も流して寝るときになって、問題というものはやってくるらしい。

自身の寝室に入ってすぐに違和感に気がつき

帝国の若き皇帝サングルド・ジャヴ・フリードリヒは冷静に腰の剣に手をかけた。

そのまま、何やら膨らんでいる自分のベットの掛布をめくると、そこには少女が眠っていた。

………変な格好をした少女が、自分のベットで寝ている。

警備の厳しい皇帝の私室と、ある理由から

可能性は低いが、暗殺者が

夜這いをしにきた貴族のバカ女かと思っただけにこの状態は予想がつかなかった。

以前友人と流した自分がホモであるという噂はどこかで曲解されて幼女趣味にでもなったのだろうか。

もちろん自分はホモでも幼女趣味でもないが、女性というものに興味ではなく嫌悪を覚える、

という一種のトラウマのようなものがあるために噂を流して女性を遠ざけたのだ。

友人の一人にそういった趣味を持つ者がいたためにたくらみは成功し、

近頃ほとんど女が近寄ってくるなどなくなっていたのに、どうしてこんな状態になっているのであろうか。

「おい」

とりあえず声をかけてみるが少女に起きる様子は全くない。
よくよく見てみると頬に泣いていた跡がある。

何なのだろうか。

この恰好を見るからには、ほかの国の者と考えるのが妥当だろう。
だが、記憶を探ってみてもこんな恰好をする国などない。

さらに、色素は薄いが黒茶の髪の毛とは珍しい。

黒に近い色の髪の毛はサングルドでは生まれにくい。

この国で信仰されている神の持つ色だからだ。

一瞬、似たような色が頭の中を過ったがすぐに眠たさに襲われる。
頭を軽く振って、寝ている少女へと近づいた。

ここまで近づいても全く起きる気配がない。

ジャヴはどうしたものかと、ため息をついて寝台に腰を下ろした。
そうして、無造作に少女の髪の毛に手を伸ばす

色が珍しかったからかもしれない。

髪の毛を触ってみるとシーツの上に広がっている通り癖がなかった。
さらり、と手から滑り落ちる。

ふと、今更であつたがここでも感じる嫌悪感がまったくないこ
とに気がつく。

女ならば少女でも老女でも関係なく感じていた嫌悪感が今はない。
不思議な感覚に驚きながら、皇帝は少女の肩を揺らした。

「おい」

少し強くゆすると少女がうつすらと目を開けた。髪の毛と同じ黒茶
の瞳が見える。

だが、焦点はあっていない、寝ぼけているのだらう
ゆっくりと皇帝を見上げると、笑顔を見せた。

「リルヴァーナ・・・」

そのままこてんとまた、ベッドの上に転がってしまふ。

女神の名前を呼んで寝こけた少女。殺気もないし、安全そうだが、どうしろというのだろうか。

少し考えて、ジャヴはこういう結論に達した。

まあ、寝る場所は十分にあるか

そう考え、皇帝は少女の隣に寝転んだ。

朝、目が覚めると誰かの腕の中にいた。

リルヴァーナだと思い込んでそのまま胸に顔を当てるようにしてすがりつくと、

おかしいことに気がつく

リルヴァーナの胸がない

昨日はあったはずなのに、だ。

おかしい。これはおかしい。

意を決して晴が顔をあげると、深い紫色の瞳とぶつかった。

あっちも驚いているのかちよつと眼が見開き気味だ。

光を反射する長い銀色の髪と紫色の瞳の、日本人ではない青年。顔はとても整っている。

なまじ整っているだけに、髪の色などとあいまって少し冷たい印象がある。

マッチョといえるほどがっしりはしていないけど

腕の筋肉がしっかりしているから何か武術でもしているのだろう。

と、青年の腕をぺたぺたと触りそこまで考えてから自分がちよつと混乱していることに気がついた。

知らない人の腕を触って筋肉の確認をする乙女はあまりいないだろう。

というか、知らない人に腕を触られて大人しくしているこの人も何か反応をしてほしい。

青年はそんな晴をただ見ていた。

あまり表情は変わらなかったが、なんとなく怒っている雰囲気では

ない。

昨日のことでちょっと耐性がついたかなと思ったのだけれど、所詮人間は1回程度じゃ耐性は身につかないらしい。自分の学習能力にも疑問を抱きかけて、気がついた。そもそもリルヴァーナの腕の中で眠っていたはずが、起きたらやらきれいな青年の腕の中。混乱しないほうがおかしいかもしれない。

「お、おはようございます?」

「おはよう」

外国人みたいなのに言葉が通じる。

それに、きちんと挨拶は返してくれた。

少なくとも直感から言って悪い人ではなさそうだ。

抱きしめられているのだが、他に何かされた様子もないし

彼が落ち着いている様子から考えて、これが彼のベッドなのだと予想がつく。

やっぱり謝るべきだろうか。

晴が悪いわけではないのだけれども。

考え始めた晴の横で

青年はゆっくりと晴を抱きしめていた腕を外してベットから上半身を起こし

伸びをした。しなやかな動きは、大きな猫みたいだ、と思う。

やっぱり、彼の様子からして危険はなさそうなので、晴もあくびをして伸びをした。

ここは、どこなのだろう?

あのあと晴はリルヴァーナの腕の中で泣き疲れて寝てしまったのだと思う。

と、いうことはリルヴァーナが連れてきたに間違いないが、何の説明もなしとはひどくないだろうか。

彼も吃驚していたようだが、まずは状況を知らなければ話にならない。

とりあえず、初めて会った人への基本を実行してみた。

「あの、はじめまして、私は晴・三上と言います」

「ハル・ミカミ？」

「はい、晴がファーストネームで、三上がファミリーネームです」
外国っぽいからこういう名前を紹介したがどうやらあっていたらしい。ちよっとほっとする。

「私はサングルド・ジャヴ・フリードリヒだ。どう呼んでも構わない」

そう言って頭をなでられた。

言葉は冷たいが、いい人だと思う。ただし、子供扱いされてる感が否めないが。

「ところで・・・」

質問をしようとした青年の言葉にかぶさるようにして扉が乱暴に開かれた。

「ジャヴー！いい朝だね！さあ重要なお知らせがあるんだ！

この私の神官長としての今朝のお告げで女神が御子をこの国に預けるとでたんだ！

黒茶の髪と瞳の女性だってさ！！何年ぶりだと思う？」

金色の長い髪を一つにくくったその人は白を基調とした服を着ていた。

まるで、物語の中の王子様が着るような軍服とでもいえばわかりやすいだろうか。

その人自身も、まるで王子様みたいな顔立ちだ。

緑の瞳を輝かせて青年と晴のいるベットに目を向けた白い人は、そのまま固まった。

綺麗な顔なのにあごが外れそうなくらい口が開いている。

思わず定規を当てて測ってみたいくらいだ。

「ジャヴ・・・？その女の子は・・・？まさか・・・」

白い人が何か言っているが、小さな声すぎて晴には聞こえなかった。その代わりジャヴが晴に尋ねる。白い人の登場にも彼の表情はあまり変わらなかった。

「ハル、おまえは何歳だ？」

「16歳です」

一呼吸おいて、

傍目に分かるくらいぎよつとされた。確かに今でも中学生に間違われるが、その反応は傷つく。

「ジャヴは、何歳なんですか？」

お返しとばかりに、ちよつと気になっていた青年の年齢を尋ねると、19歳だと言われた。

こつちもちよつと吃驚した。

彼の表情や落ち着きようから、もうちよつといってるかと思っていたのだ。

それがわかったのだろう。ジャヴがちよつとムツとしたように言った。

「お前が小さすぎるだけだ」

事実だが、何か釈然としない。

「今に大きくなります」

こんなやり取りを見ていた、さっきの話からするとシンカンチョーとかいうらしい青年は、

間の抜けた顔から、一気に怖い顔になってベット近くまでずんずんと歩いてきた。

「ちょっとジャヴ。女には興味無いんじゃないの？」
そうなのか、特殊な趣味をジャヴは持っていたんですね。

白い人の言葉に、晴は内心なるほど、と手を打つ。
だから、晴が危険を感じなかったのだ。

白い青年の言葉にジャヴに視線を向けると、ジャヴはうなずいた。
「興味がないというか、嫌悪感があるな」
嫌悪感か、それは大変だな。と

そこまで考えてちょっとおかしいことに気がついた。
晴は女の子だ。世間一般的に見てどう考えたって女の子だ。
じゃあ、ジャヴというこの青年は晴にも嫌悪感を抱いていたのであろうか。

「すみません・・・」
いやな思いをさせちゃいましたか？と言外にこめた言葉をおくると、
ジャヴはちょっと困ったような顔をして首を振った
「いや、なぜかお前は大丈夫だ。安心していい」
ジャヴのその言葉から

どうやら、この幼い外見ならば大丈夫らしい。
そう勝手に結論づけた晴は、この青年に嫌われなくてちょっと安心して
していた。

人から嫌われるのは、あまり好きではない。
だが金髪の青年の解釈は違ったらしい。

「ジャヴ！なんてことだ！ジャヴが、ジャヴが女に騙される日が来る
だなんて～！！」

頭を抱えて叫びまくっている。
騙されてはいないと思うのだが、この状態であつたならば勘違いさ
れてもおかしくない。

こんな風に叫ぶなんて、もしかしたらこのシンカンチョーという青

年はジャヴの恋人なのかもしれない。

悪いことをしたな、と思ったが、どう説明すればいいのか全く分からない。

何しろこの世界に来てまだたった1日なのだ。

恋人（仮定）のはずのジャヴも白い人の誤解を解くでもなく

ベッドのすぐ脇で叫び続ける彼を見ているだけだ。

しばらくたって、叫び疲れたのか

青年が静かになってきたところを見計らって、ジャヴが青年に話しかけた。

「おい、カイザーク。お前が何を思っただろうでもいいが、女神の御子とはこれのことじゃないのか？」

さつき青年が言ったことをきちんと聞いていたらしいジャヴは、ハルを指さす。

ハルは指差されたあげくにこれ、と言われたが気になったのはそこではなかった。

「めがみのみこ・・・なんですか？それ」

女神なら知っているがめがみのみことはどう漢字変換していいのかわからなかった。

そんなハルを見た青年は、鼻で笑う。

「ジャヴ、女性といっただろう。そんな10歳くらいの少女を捕まえて女性とは・・・

目がおかしくなってしまったのかい？」

「ちよつとまってください！少女はひどいです！私は！」

叫んだハルを手を上げて遮ると、青年は冷ややかな目を向けてきた。ジャヴに向けていた目と違って、本気で敵意がこもっている。

「そうだね、皇帝の寝所に忍び込むなんて少女ではなく、悪女の間違いだったね」

そう言うが早く、青年の手元が素早く動いてハルの喉元に剣があてられた。

「さあ、君はこの手のものだい？何をしにここに来た。

さつさと吐かないとかわいい首が体から離れるよ」

そこにさつきまでの叫びつつけていた変な青年はいなかった。

あまりにも素早く変わった雰囲気、凍りつくような視線と殺気が彼

を取り巻いている。

気を抜けば殺されるだろう。

隠されることがない殺気と、あてられた剣から伝わる力が示していた。

さっきまでの会話の中で殺されるような話題の要素はあっただろうか。

ハルの主観だけだが、なかったと思う。

じゃあ、寝室に入っただけで殺されるような人のところに来てしまったのだろうか。

たぶん、それが正解だろう。

混乱していた時は目に入らなかったが、剣を首にあてられた状態で動き出した脳は

視界に入るものたちが高級なものとは縁がない自分でもわかるほどきれいで凝ったものばかりだと訴えていた。

ジャヴは偉い人であつたとしたら、そこに勝手に不法侵入したのは私だ。

殺されても仕方がないかもしれないが、あいにくと簡単に殺される気もない。

白い人の言う言葉に全く心当たりがないのだから。

答えようもないし、いきなり剣を突き付ける人に話したくもない。

そう、のど元に剣を突き付けられた一瞬で冷静に考えた自分に苦笑する。

あいにくと、こんなことは初めてではなかった。

平和な日本という国においてさえ、ハルの日常は妙に危険に満ちていたのだから。

周りの人間から同情を向けられ、あだ名がつくほどに。

様々な危険から身を守るために必死にいろんなことを学び、身につけて今日まで生きてきたのだ。

あまりに遭遇する事件や危険、昨日初めて知ったその理由は世界に嫌われていたから、

なんていうふざけたものだったけれど

おかげで、16歳ながら世界の理不尽さはわかっているつもりだ。

死にたくないなら足掻くしかない。

隙を探しながら、無表情に青年を見上げると青年も殺気を向けてきたまま動かない。

冷静だった。隙がまったくない。

「動揺もしない。本当に可愛くないね。何も言うつもりがないのなら死――」

「16歳だそうだ」

青年の言葉の途中でジャヴが何も感情のこもっていない声で言った。ジャヴの言葉と、内容に一瞬青年の動きと注意がそれる。

その瞬間を、まっていた。

ハルは自分の喉にあてられていた剣に首が切れるのも構わずに、

わざと首を押し付けて隙間を作る。

ハルが予想した通り、青年はジャヴの言葉に少し迷いが出たのだらう。

剣を引いてハルの首を飛ばすことをとっさにしなかった。

それがハルの狙いだった。

ハルの首は剣を押し付けたことによって切れたが、切れただけだ。

首の傷には構わずにハルは小さくやわらかい体を利用して体をひねりあてられていた剣の軌道から抜けだした。

突然の反撃に応えようとした、青年の

剣を持っていた手が返される瞬間をねらって青年の懷に飛び込む。

剣は、一定以上離れた相手を攻撃するのに適している。

つまり近づきすぎた人間にとっさに攻撃しようとするならば手首を返すことになるのだ。

ハルは、剣を持っていた青年の手首を捕まえると合気道の応用でひねりあげた。

剣から手が離れそうになったところで手首を捕まえていた手を放し落ちかけた剣を奪って、青年に向けた。

全てはたった数秒の出来事だった。

ここまでハルが素早く、的確に動けるなんて思ってもみなかったのだろう。

なにしろ、青年の中で彼女は10歳くらいの少女ということになっていたのだから。

ハルだって、いつも相手にしている包丁やナイフとは違う刃物相手で、

うまくいくかはわからなかった。

けれど、このとき運はハルに味方した。

火事場の、というやつだろうか。いつもよりも素早く動けたし、青年の手をひねるのも簡単だった気がする。

初めて扱う形の剣を支える持ち手が震えないように、両の手で剣を支えた。

逆転された青年が晴を睨む。

そうしてハルの顔の額のあたりに目を向けて、驚いたように緑の目を見開いた。

「おまえ・・・」

「10歳じゃありません。16歳です！失礼な人ですね！！」

青年が何か言いかけていたがとりあえず言いたかったことを言う。首の傷がちょっと痛いので乱暴な言い方になってしまったかもしれないが

いちばん言葉で訂正したかったのはそこだ。

喉を動かしたせいかさっきの傷からとろりと生暖かい血が流れるのがわかった。

気持ち悪い感触に思わず顔をしかめると、ふわりと傷に何かがあてられた。

見ると、ジャヴが寝間着の袖口を傷に押し当てていた。

首を絞めるでもなく、どうやら圧迫して止血しているらしかった。

「痛いかな？」

そついった彼はなぜかハルのもつ剣を取り上げたりせず、

なぜか、侵入者扱いをされたハルを心配してくれているようだった。

「少しだけ」

素直にそう言うともた血が流れたようで寝巻の袖の赤がじんわりと広がってゆく。

「喋るな。今医師を呼ぶ。カイザーク、呼んで来い」

ハルに剣を突き付けられている青年にそう命令するとジャヴは

ハルの首に少し強く袖を押し当ててきた。

傷は意外に深かったらしい。

血は苦手なほうではないが、何しろ起き抜けだ。

ハルは寝起きが悪い。ときどき寝惚けることもあるくらいだ。

めまいがしてきたハルは剣を両手から外すとゆっくりとしゃがみこむ。

からん、と乾いた硬質な音をたてて剣が床に落ちる。
床に膝をついてしまうとジャヴの手だろうか、
寝台に寄りかかるように体の位置をずらしてくれた。
どれほど経ったのか、

青年はいつの間にかいなくなっていて

ジャヴの命令どおり医師を呼んできてくれたらしい。

急激な失血によるめまいか、ただの寝起きのためか

目を閉じて動けないでいたハルの首に

ジャヴではない第3者の手が添えられた。

「大丈夫ですよ。手をお放しになってください。でなければ治療ができません」

ハルは手を床につけているのでハルではなくジャヴへの言葉だろう。

優しい老人の声が祖父とかぶって聞こえた。

気が抜けて、涙が出てしまいそうになるのを必死でこらえる。

もうどれくらい祖父の言葉を聞いていないのだろう。

いつもはこんなことで泣いたりなんかしないのに。

信じたくはないし、まだ完全には信じられないのだが

世界から嫌われ、こちらに放り出されたということが精神的にきて
いるのだろうか。

そんなことを考えていたら、ジャヴの手が首から外れていった。

手をついていた体を支えてくれる。

少し引き寄せられた形になった。

力が出なかったのでジャヴに寄りかかってしまう。

「ありがとう」

と、唇だけで言うと言「いい」とだけ返ってきた。
なぜか、その一言ですごく安心する。

と、ここでわずかに残っていたハルの理性が自身に疑問を投げかけた。

ほぼ初対面の、しかも美青年に傷口押さえてもらい、
あまつさえ、支えてもらって安心するのは何故なのだろうか？

答えを考える。

やっぱり美青年だからか。

でも、ふつうは緊張するだろう。やっぱり美青年だし。

ああ、でも男性愛主義者だって言ってたしな。

でも、これが金髪の方の青年だったら緊張とかの前に意地でも自力
で立っていたと思うのだ。

じゃあどうしてなのだろうか？

思考はとりとめがなく、痛みのせいか冷静に分析することができない。

考えれば考えるほど、よくわからない気持ちちがハルの胸の中から出てくる。

まるで、無理矢理おいしいものを食べらせられたような。

釈然としない気持ちだ。

回らない頭で懸命に考えていたからか、顔にまで血が昇ってきたように感じた。

そうこうしているうちに、そっとハルの傷口に手が添えられる。
消毒するのだろうか？

出血が多かったようだもしかしたら縫うのかもしれないな、
と思っていたら

突然、首のあたりが一瞬確かに温くなる。

そのすぐ後にはさっきまでの感じていた傷の痛みと熱さが消えていた。

めまいは変わらなかったが、いきなり体が楽になったのだ。眼を開き、ゆっくりと喉元に手をやると血はついたが、肝心の傷はなかった。

「あれ・・・傷・・・ない・・・？」

茫然と呟くと、そばにいた老人が顔をくしゃくしゃにして笑った。着ているものは金髪の青年と同じものようだったが、胸に金色の花の刺繍が入っている。

「お嬢ちゃん！ 治癒もしらんのかい？ いったいこの山奥で生活してたんだい？」

笑いながらハルの顔を覗き込んだ老人も、先ほどの青年と同じようにハルの額を見ると一瞬驚いたようになる。

「・・・ああ、額に御印があるねえ。お嬢ちゃんが女神の御子様かい・・・」

わしは、神殿庁のグラン・ドルフという」

それからハルの額をまるで孫にするように、しわくちやの手でゆっくりとなでる。

懐かしくて、されるがままになっていたのだが

グランはおもむろに立ち上がり、近くにいた青年を思いっきり殴り倒した。

「御子さまを傷つけるやつがおるか！ この馬鹿者！！」

本当に思いつきりだったのだろう。

と、どうか老人の一撃にしてはいやに青年が吹っ飛んだ。青年はものすごい音を立てながら壁に激突していったし、今も動かない。

おそろおそろ見ると、完全に白目をむいていた。大丈夫だろうか？

グランはなおも、倒れた青年近づくと青年を蹴り始めた。

「御印も確認せんで！ この馬鹿が！ 一遍死んでその腐った脳みそ取り替えてこんかい！」

白目をむいた人間にやるようなことではなかった。

一方的な暴力が続く。

ジャヴも、見ているはずなのに一向に止めようとしなない。

さすがに、かわいそうになってきたハルはグランに向かって声をかけた。

「あ、あの・・・」

「なんだい？ お嬢ちゃん」

グランは素敵な笑顔と共に振り向いた。

素敵過ぎて、かける言葉が見つからないくらいだ。

けれども・・・さすがに、

「さすがに・・・しんじやいませんか？」

そう言ったハルの言葉でグランは青年を蹴るのを止めた。

ちよつと舌打ちしていたのが聞こえたが、気のせいということにしておこう。

青年をけり終えて、ゆつくりとハルたちのほうに戻ってきたグランは、

明らかにちよつとすつきりしたいい笑顔だった。

グランはジャヴの前に来ると深いお辞儀をした。

「陛下。では、わしはこれで・・・お嬢ちゃんはわしと来るかい？」

御子様は神殿庁の管轄だからね。これからいろんなことを知らないきやいかんだろうて」

祖父のような、グランのしわくちやの手が差し出されたが、ちよつと戸惑ってしまう。

神殿庁とはどこかはわからないが、みことやらが行く場所らしい。

きっとリルヴァーナが、ハルをみことやらにしたのだろう。

けれど、神殿庁にそこで転がっている青年みたいなのがたくさんいたらどうしようと思ったのだ。

グランみたいな人ばかりだといいいのだが・・・

困って、ハルは思わず、ジャヴを見上げてしまった。

不安がハルの顔に出ていたのだろう。

少し考えたような沈黙の後、ジャヴはハルの頭を撫でて言った。

「別にここにいていい。神殿庁から教育係を呼べばいいだろう」

無表情だったが、頭をなでる手は優しくかった。

「ありがとう、ございます」

グランの懐かしさとは違うこそばゆさを感じながら、ハルはジャヴにお礼を言った。

小さく見えることも、時には役立つらしい。と考えながら。

このときグランが、ジャヴの言葉とハルの頭を撫でる動作に目を見開いて絶句していたのを

ハルは見えていなかった。

この世界にふっ飛ばされて3日目。

ハルはこの城の何かがおかしいことに気がついた。

まあ、城といってもまだジャヴの居住区域から出たことはないのだが。

とりあえず、ここに来て一番驚いたことは、

銀髪的美青年、ジャヴがこのサングルド帝国と呼ばれる国の若き皇帝だったということだ。

19歳といていたはずなのに、その若さで皇帝だという。

確かに、外国では若い国王がいるところもあると、聞いたことはあった。

ただ、若い国王がいたとしても政治的な面ではあまり活躍しているかどうか怪しいところだ。

けれど、ジャヴはある程度重要な案件では最終決定権を持っているし一応総ての、帝国に関わる機関を動かすことができると言っていた。上の地位に立つにはそれなりの実績が必要であり

年齢も経験の一つとして重要視するが、皇帝だけは例外なのだという。

そんなこの世界の常識がハルにはいまいちピンとこない。

まあ、日本とほとんど環境が違うのですぐに納得できるものではないかもしれない。

一つだけ、納得できたことといえば

カイザークと呼ばれた失礼な人があれだけ警戒心もあからさまにしたことだ。

王様の部屋に不審者がいたら、あんな対応にならないほうがおかしいだろう。

だからと言って、彼に対する印象が良くなったのかと聞かれれば

ハルには否という方かなかったのだけれど。

もうひとつ、ハルが驚いたのが敷地の広さだった。

ハルがいるのはジャヴの居住区域で、つまり皇帝の家のようなものらしい。

館や塔というよりも、独立した一つの城に近いそこは

皇帝一人のためにしてはとても広いのだ。

万里の長城みたいな塀の中は東京ドーム何個分だろうと考えてしまったのは日本人の性だろうか。

だが、窓の外から眺める限りでも確実に5個以上は入ると思う。建物だけでなく、庭もだっ広いのだ。

でも、おかしいのはそこじゃない。

この区域、というか、城に人が少なすぎるのだ。

ジャヴという皇帝が住んでいるところなのだから、もっと警備の人とか、メイドさんとかいてもいいはずだ。

けれども実際に3日間で見たり会ったりした人は10人ほど。

同じ人には何回も会うのだが、他の人とは会わない。

最初はハルが警戒されているのかとも思ったりしたのだが、それにしてはこの城は静かすぎる。

人が動いている気配というか、ざわめきがちつとも聞こえてこないのだ。

つまり、ハルが警戒されていたり監視されているのではなくて、もともとこの区域には働いている人が少ないということなのだろう。そういえば、ジャヴも皇帝陛下という身分のはずなのに着替えなどは一人でしているらしい。

ハルはこの国の服をまだ一人では着られないので、ディアというぽっちゃりとしたおばさんに手伝ってもらっている。その人が、そう話してくれたのだ。

偉い人もきちんと身の回りのことを一人でするんだなと、感心した。ディアはこの城で見る3人の女の人のうちの1人。

この城は人が少ない上にさらに女の人はもっと少ない。

3人はみんなメイドのような服装をしているおばさんで、侍女というものらしい。

1人はマリーという洗濯物を集めて洗っている人。

2人目はエリザベスという人で、いつもものすごい速さで掃除をしている人。

そして、3人目のディアは食事のときとか、服の手配とかそのほかいろんな細々したことをやっているらしい。

みんないい人たちだ。

ディアが主にこの世界に不慣れなハルの身の回りのことを世話してくれているのだが

カイザークとかいう、あの白い人のように

いきなりジャヴの寝所に現れたハルのことを怪しむでもなく、ものすごく好意的だった。

ディアだけではない、城の中で出会う人のほとんどがそうだった。

ジャヴやグランからなにか伝えてあったのだろう。

彼らは好意的ではあったのだが、

微妙に何か期待のこもった目で見られているような気もした。

グランもそういう目を時々する。

2日目から毎日、午前中に、ハルはこの世界のことなどを教えに来てくれるグランと勉強会をしているのだが、

ハルを気遣ってくれているのか

グランは空いた時間にはお菓子やお茶を持ってきてくれたり、声をかけにきてくれた。

彼の教え方とはとても解りやすいし、この世界のことを知るのはいかに面白。

ハルの知る常識からはかけ離れているものもあったが

政治や、お金などの考え方はよく似ていた。

今日も、さきほどまでグランと勉強会をしていたのだが、ディアが来て「だいぶ時間を過ぎてますよ！」と、授業を中断させたのだった。

根を詰め過ぎるのも良くない、とディアは

ハルとグランがすっかり忘れていた食事を持ってきてくれたのだ。

それなりに記憶力が良く、勉強熱心なハルにグランもついつい熱が入ってしまうらしく、

気がつけばいつも午後をだいぶ過ぎていた。

グランはハルに、この世界の仕組みや成り立ちを丁寧に教えてくれた。

それはもちろんハルの常識とはかけ離れているからこそ、

現実として理解するのは簡単ではないが、神話を聞いているようで面白い。

実際に神という存在を知ってしまっているからこそ、切り替えも早かったのかもしれない。

この世界の輪郭が見え始めてきていた。

この世界は6人の神様によって作られたフォールという世界で、6人の神様にちなんだ6帝国があるという。

帝国のほかにも国はあるが、帝国と呼ばれるのは6つだけらしい。この国は光の神様リルヴァーナにちなんだ国でサングルド帝国という。

リルヴァーナの眷族である光竜を祖先に持つ皇帝が代々治める国で、他の帝国はそれぞれ闇の神様ガウルの闇竜の末裔ヒューバルド帝国、水の神様リインファの水竜の末裔ラヴェル帝国、風の神様テューダの風竜の末裔シルフィ帝国、土の神様キリエの土竜の末裔ムルグ帝国、火の神様カカルヴの火竜の末裔ルスティーダ帝国がある。

6つの帝国はそれぞれ、独立しながらも協力して大きな世界を治めているそうだ。

神々と竜によって帝国ができたというグランの話は、まるでおとぎ話のようだった。

帝国以外の他の国は帝国に協立や属国を誓った国だったり、完全に独立体制を貫いている国なんかもあるらしい。

そういった国は小さいが多く、帝国には手を出さないが国同士の争いは頻繁に起こっていると言っていた。

そういった事への介入や、戦争の停止、他の帝国との連携、自国の政治などを、皇帝や帝国が行っているという。

サングルド帝国での主な政治の仕組みは頂点に皇帝、その次に政庁、財庁、魔術庁、神殿庁、騎士庁があり、またその下にいろんな機関があるというものであった。

政庁には5人、他の各庁には3人の庁官長がいて、仕事と権力を分担して政治を行っている。

政治に関しての重要な案件は各庁の庁官長と皇帝とで会議を行って

決議するのだそうだ。

最終的な決定権は皇帝にあるが、決議も決して飾りではなく重きをおいているという。

また、法律もきちんと定められていてサングルド帝国法という分厚い本が5冊ほどあった。

これはグランが持つてきてハルに1冊見せてくれたのだが、何とか書いてある事の意味はわかるものの、

ハルには難しかった。

ハルは女神のおかげなのかは分らないが、便利なことに

この国の言葉だけではなく書いてある文章の意味もだいたい理解できることが分かった。

だが、文字は書けない。

そのため、グランとの勉強会のほかに小さい子用の教本で文字を覚えていく。

ハルがディアの用意してくれた遅めの昼食を食べながら

今日習ったことを整理していると、

部屋のドアから軽めのノックの音が聞こえてきた。

11（前書き）

皇帝視点です。

若き皇帝、サングルド・ジャヴ・フリードリヒはいつもの執務室で3日前のことを思い出していた。

3日前に現れた少女。ハルのことである。

ジャヴは5年前の前皇帝の逝去の際にあつたある出来事で、女性というものに嫌悪しか感じなくなっていた。

軽く殺意まで覚えるときもあり、相当なものである。

だからと言って男に恋愛感情を抱いたことはもちろんないのだが、女性に触れられるだけで殺意がわくという今までの状態から

自分は一生独身で過ごすことになるかもしれないと先日までは考えていた。

帝位是最悪、すでに貴族に降嫁した姉の子供でも養子にすればいいかと思つていたのだ。

血筋的には少し問題があるが、リルヴァーナの庇護が厚いこの帝国ならば

何とかやっていけるだろう。

そう、考えていた。

あの少女が現れるまでは。

あの少女、ハルは出会いからして不思議だった。

寝室にいきなり現れたのに、自身は彼女を切り殺すことなく放置してしまつた。

ジャヴの居住区域は極端に人の数を減らしてある。

あそこにいるのはジャヴに幼いころから仕えている

比較的嫌悪を感じないメイドと使用人や護衛のみ。

彼らが優秀なため、侵入できるものはよほどの実力をもつた暗殺者くらいであろう。

一度、勘違いをした女官が来たこともあつた。

なかなか優秀な者だったのだが、仕事を評価したことが勘違いを助長したらしい。

メイドたちも、仕事のことでと思い彼女を通したらしいがジャヴが彼女に女性としての魅力を感じたことはなかった。

執務室に来ていた馬鹿女たちのことを知らなかったわけではないというのに

私室まで来て、無事に帰れると過信していた彼女に待っていたのはジャヴの容赦のない攻撃だった。

皇帝の私室に許可なしに、理由もなく侵入したとして不敬に問われたと聞く。

一応命は取り留めたと報告があつた気がするが、彼女のそれからに興味はなかったので

その後どうなったのかは知らない。

最初、ハルに気がついた時にも、実際殺そうと思っていたのだ。

寝ぼけていた時の自分の状態をはつきりとは思いだせないが

ただ、難攻不落だったこの場所に侵入してきたやつ顔を見てやろうと思つたのかもしれない。

それが

あの時掛布をめくつた理由だったと思う。

だが、掛布をはいだところに居たのが少女だったのは驚いた。

しかも、変な格好でのんきに寝ている。

一瞬、馬鹿な貴族の差し金かと思つたが、

そこまで、ジャヴを理解していない貴族などもうほとんどいないだろう。

女嫌いのジャヴの居住区に死を覚悟させてまで娘を送り込むだろうか。

いくらなんでもそんなことはしないだろう。

新手の暗殺者かとも思つたが、暗殺者が標的の部屋で寝こけるはずもない。

何より、殺気もないし、寝たふりをしているのも感じられなかった。うつすらと覚えていることは、声をかけて髪の毛を触ったということだ。

ジャヴは極限に眠い時寝ぼけた様な状態になってしまっただが、女性に声をかけ、ましてや触るなんてことをするほどではない。ただ、あの少女に興味が湧いたのだと思う。

触ってからしばらくして嫌悪感がないことに驚いた。

それでなくとも、触ってから気がつくなんて頭がどうかしていたんじゃないかと思う。

あの後、普通にベットで一緒に寝たのはたぶん衝撃が大きすぎて理性的な考えが停止していたのだろう。

いや、今でも停止しているのかもしれない。

なにしろあの日から、ハルという少女については嫌悪なんてまったく感じていないのだから。

むしろ、何か小動物のような感じが可愛らしいとも思う自身がいる。起きて、自分がハルを抱き込んでいたことにも驚いたが、おかしいとは思わなかった。

黒茶の瞳が女性に対する嫌悪感なんてすつとばしてしまっただかのようにも思える。

あれで16歳とは驚いたが、少女じゃないとわかって何も変わらなかった。

カイザークが部屋に来た時の言葉で妙に納得したくらいだ。

これだけ嫌悪を感じないのは、普通の少女ではなく女神が選んだ御子だったからか、と。

ジャヴの嫌悪感もさすがに神に対してはあまり向けられることがない。

カイザークが少女に向かって剣を構えたときにはわずかに憤りを覚えたような気がする。

ハルが16歳だという言葉のカイザークに言った時も女性に援護するような言葉をかけた事実が

そんな自分が信じられなくて、思わず固まってしまっているうちに少女の流血だ。

ハルのカイザークに対しての行動と度胸はものすごかったと思う。常人ではできないような無駄な動きがない逆転。

しかし、それを見ても彼女が暗殺者だなんて思わなかった。

いや、すでにそう思えなかったのかもしれない。

ハルの首から血が流れているのが目に入ったときには、

自分の体の血が逆流したような感じがした。

首に袖を当てて圧迫しても、血が逆流したような感じは止まず。

気がつけば、思わずカイザークに命令していたのだ。

カイザークも何か思うところがあつたのか、いつもならば

もう少し疑り深くなるところを急いで部屋を出て行った気がする。

今思えば

神官たちや魔術師には、

御子に付けられた印を見分けられる技があると聞いたことがある。

カイザークも何か感じていたのかもしれない。

あの時、カイザークが医師でもある神殿庁官長グランを呼んで、

戻ってくるまでの間も妙な感覚は収まることがなかった。

そのため、目を閉じたままのハルに何も声をかけられないまま

グランが来てもジャヴはハルの首から手を離せなかったのだ。

グランの言葉にやっと放して、ハルの体を支えたのだが

ハルの目は開かず、顔色も蒼くなっていた。

思わず声をかけたら、ありがとうと唇の動きだけで返ってきて

どうやら意識もはつきりしているらしいとわかって妙に安心した。

ハルにグランが治癒をかけるとハルの傷は癒え、

ジャヴはその時にはじめて自分がハルを心配していたということに

気がついたのだった。

グランは、ハルを神殿庁に連れて行くと提案してくれたが

多分、女嫌いのジャヴを気遣ってくれたのだろっ。

だが、ハルがジャヴを不安そうに見つめている姿を見たら思わず

ここに居ればいいと言ってしまった。

そう言った後の、安心したようなハルの笑顔が可愛らしかったので思わず頭をなでてしまったのだが、

その時のグランの顔は見ものだった。

あの、グランが目を見開いて絶句した様子など初めて見たような気がする。

その後のハルの世話を頼んだ使用人たちの顔も面白いことになっていた。

何しろ、女嫌いの皇帝が少女と一緒に住むといったのだから当然だろう。

少女といってももう16歳だと言っていたが、完全に周りは子供扱いだったように思う。

メイドたちは、女嫌いのジャヴが連れてきたのだから

もう、嫁候補だお祝いだと騒いでいた。まあ、あそこにはメイドも3人しかいないのだが。

この様子で行くとハルを皇妃にするために何も言わずともいろいろ世話してくれそうだった。

幼女趣味だと噂が立ちそうだが、仕方がない。

独身でいようかと思っていたところに、

嫌悪感がまったくわかない少女が出てきたのだから

これぞまさに女神の思し召しというほかないだろう。

ジャヴの顔に自然と笑みが浮かぶ。

出会って3日目にして、ジャヴにはハルを逃がす気は全くなかった。

皇帝の執務室の扉がノックもなしに開かれる。

こんなことをして許される人物は決まっているため、訪問者が誰かはわかっていた。

ため息とともにジャヴが顔をあげると、ジャヴによく似た線の細い美青年が執務室に入ってきたところだった。

いや、青年というのはおかしいだろう。

よくよく見れば、女性特有の体つきをした男装の麗人。

彼女はアルトの声を響かせ、芝居がかった仕草でジャヴに言い放った。

「ご機嫌麗しゅう。我が弟よ！とうとう運命の人を見つけたと聞いて思わず屋敷を飛び出してきてしまったよ！

さあ！恥ずかしがらずに姉さんに未来の義妹を紹介しておくれ！！」

「うるさい。帰れ」

ジャヴと彼女ではテンションがまったく違う。

だが、麗人は気にした様子もなくしゃべり続けた。

「ふうん。年を重ねたことで女性に対する嫌悪が消えたわけじゃないんだね。

ともすれば、我が弟が幼女趣味になったという噂は本物だったかな？」

最後の言葉は小さく呟いて、麗人は

ジャヴと同じ紫の瞳を面白そうに細めると、

入ってきたときと同じように唐突に体を回転させ、ジャヴに背を向けた。

「さて、・・・どこに行く気だ？」

嫌な予感がしたジャヴは、出て行こうとしていた実姉に問いかける。弟の疑問を受けて、麗人は背を向けたまま片手を上げて答えた。

「決まっている！弟に捕まえられた天使を見に行くのさ！」

言い放つて、ジャヴが何か言う前に扉は閉められた。

こんな時の彼女の行動はとても素早い。

ジャヴは今の姉に何をいつても無駄だろうと諦め、今日中に片付けなければならぬ手元の書類に目を戻した。

なんだかんだ言っても、彼女はジャヴに細心の気を使っている。

男装は昔からだ、あの事があってからは

会う時があっても一定距離には入ってこないし、大抵の連絡は手紙や音声で行い

彼には滅多に会いに来なくなった。

そんな彼女は、今回のことで驚いているのだろう。

いつもよりも口調が早かったし、おどけた表情も少なかった。

降嫁したとはいえ、元帝国の皇女だ。気を使つてないように見せかけて、周りに目を配り、配慮を忘れない。

そんな彼女だからハルに会わせても、そんなに悪いことにはならないだろうと判断してそのまま行かせた。

きっと姉はあのまま真つ直ぐ彼女を訪ねるだろう。

使用人たちも姉であれば中に入れてしまう。

初めて会うハルは、彼女の性格と姿に驚くかもしれないが、姉がハルを気に入ってしまえば結婚は早くなる。

姉も気に入った物はすぐにでも手元に置きたい人だから、ハルを丸めこむのに利用できるだろう。

使えるものは何でも使う。

そうしなければ、欲しいものは手に入らない。

そんなことを考えていたら、今度はきちんとしたノックの音が部屋に響いた。

「入れ」

ジャヴが入室の許可を出すと、扉が開き部屋の中にグリーンの物体

がすべりこみ、そつと扉が閉められる。

グリーンの物体は明らかに執務に関係のない類であった。

外の近衛は一体何をやっているのだろうか。

そう考えたジャヴの耳に、よく通る高めの声が届く。

「ご機嫌よう。皇帝陛下。わたくし、父の使いで参りました。ヴィ
オラ・ビーデルと申します」

物体は胸元が大きく開いた、グリーンの鮮やかなドレスを身につけた少女だった。

少女は貴族らしい完璧なお辞儀をすると、微笑みながらジャヴを見上げる。

一般的に見て整っている顔。幼い顔立ちだが、化粧をした顔は危うい魅力をたたえている。

大抵の人間ならば、美しいと賛美するだろう。

だが、それを見てジャヴが思ったことは一つだった。

もうきたか。

ジャヴの予想ではもう少し遅いと思っていた。もちろんこの手の女が来るのが、だ。

別に隠しているつもりはないが、ハルの外見の噂は城内に広まっているようだ。

そこから、皇帝は幼女趣味だったと勘違いする馬鹿貴族が出てきたのだろう。

そんなことを無言で考えていると、ジャヴの無言を自分の良いように解釈したのか、

少女が微笑みながら机の上にあったジャヴの手にそつと手をのせようとしてきた。

「わたくし、以前から皇帝陛下をお慕いしております・・・」

少女が言葉を言い終わる前に

さくり

と、何かが刺さる音が少女の手元で響く。

その音に少女が手を見ると、少女の手にはインクの付いた羽ペンが

突き刺さっていた。

既に少女の手の下にジャヴの手はなく、そこには羽ペンで縫いとめられた机があるだけ。

「いやあっ!」

視界に映る光景を認識し、痛みと驚きに少女は手を引こうとしたが羽ペンは手を貫通して机に深く刺さっていたため

抜こうとすればするほど、傷口と痛みが広がっていった。

羽の部分が意外に固くなっているの、少女の手の肉を抉っているのだろう。

動かすたびに血が机の上に流れていく。

「——っ!」

少女はもがけばもがくほど、酷くなっていく痛みと血に泣きながら、手のひらから羽ペンを抜こうともう片方の手で必死にペンの羽を引っ張っている。

そんな状態の少女のすぐ傍で、羽ペンを突き刺した本人である皇帝は淡々と机の上の書類を集めて持ち上げると

少女に一瞥もくれずに部屋を出て行った。

「机が汚れた。処理しておいてくれ」

そう、なんでもない事のように部屋の外で待っていた赤毛の騎士に告げる。

騎士は部屋の中から漏れ聞こえる声に、顔をしかめた。

「ジャヴ。やりすぎだ」

「通したのはお前だろう。お前の責任だ」

淡々と、告げる皇帝に騎士は苦笑いを浮かべた。

「・・・この分だと、何人も来そうだったんでな。一人がやられりや、しばらく出てこねえだろ」

とんでもないことを言った騎士に無言でジャヴは歩き出す。

「おい。どこ行く？」

騎士に呼びかけられ、書類を抱えた皇帝は少し振り向いて、戻るとだけ彼に告げた。

それだけで分かったのか、騎士は手を上げて彼を見送る。

「はいよ、了解。後片付けはしておく」

赤毛の騎士は上げた手をひらひらと振ると、面倒そうに悲鳴の聞こえる執務室へと入って行った。

軽いノックの音に現れたのは、ジャヴにそっくりの銀色の髪に紫の瞳の男装の麗人だった。

突然入ってきたその人は昼食を食べていたハルを見つけるなりものすごい勢いで近寄ってきて、喋り始める。

「貴女だね！ 弟の天使は！ はじめまして、

あなたのお名前は？ 天使さん？

ああ、自己紹介がまだだったね。 ついつい興奮してしまったよ！

私の名前はサンドラというのだが

貴女の口からはぜひお姉様と呼んでほしいものだね！

さあ！呼んでみてくれたまえ！」

すべてを息継ぎなしで言いきったサンドラは、ジャヴによく似た美貌でにっこりと

ハルにお姉様、と呼ぶことを求め始めた。

ハルは思わず食べていたものをのどに詰まらせそうになりながら

何とか無理やり飲み込んで、「ハルです」とだけ言うつと

サンドラと名乗った女性を見る。

お姉様？

彼女、サンドラが女だということはわかるのだが

なぜお姉様と呼ばなくてはならないのだろうか。

弟という言葉があったし、ジャヴによく似ているからにはおそらくジャヴの姉か血縁者であることに間違いはない。

だが、ジャヴの姉なのにハルが彼女をお姉様と呼ばなくてはならないのは何故だろう。

もしや、彼女は弟ではなく妹が欲しかったのだろうか？

悩むハルの横でサンドラは期待に目を輝かせながら、ハルを見つめ

ている。

お姉様とハルが言うまでずっと見てそうだった。

美人に見つめられるというものはある意味、とてもきつい。

きつと気のせいだとは思うが、見つめられているだけなのに妙に息苦しさを感ずる。

息苦しさ、視線に耐えきれなくなつてハルは口を開いた。

「お、おねえさま・・・？」

姉妹のいなかったハルには言いづらい言葉だった。

妙な気恥かしさで顔が赤くなる。

なぜかとても恥ずかしい。

数秒の沈黙。

ハルを見つめていたサンドラは、赤くなつたハルを、

いきなり満面の笑顔で抱き上げると

叫んだ。

「この、小動物め！ 大好きだー！！！」

どうやらハルはサンドラに気に入られたらしい。

サンドラの突然の行動に動けないでいるハルを力いっぱい抱きしめると、

人形や赤ん坊にするように、くるとその場で振り回した。

「ハル！ほんとに愛らしいな君は！！ 弟にはもつたないくらいだよ！！」

いや、ほんとにもつたない！ どうだね？ 私の息子の嫁にならないかな？！」

本当に嬉しそうに聞いてきたが、いい勢いで振り回されているため、舌を噛みそうでハルは喋ることができない。

というか、若そうなのに息子がいることにも吃驚だった。

そのまましばらくハルを振り回し、サンドラはやっとハルが喋れな

かったことに気がついたらしい。

抱き上げたままハルが座っていた席に座りこむと、そつとハルを膝の上にのせた。

「悪かったね。つい、嬉しくなつてやりすぎてしまったようだ。

ハル、大丈夫かい？」

サンドラが叱られた子犬のような表情で訊ねてくる。

本当に、顔がいい人は得だと思う。

綺麗な大人の女の人だというのに、今のサンドラの表情は可愛らしい。

それにしても、なぜ彼女の膝の上に乗っているのだろうか。

もつともな疑問が脳裏をかすめたが、子犬のような瞳に見つめられ

ハルは、疑問を飲み込んで頷いた。

「大丈夫です」

そう言つと、サンドラの顔が笑顔に変わる。

「いいね！」

サンドラはハルの頭を片手でわしゃわしゃと撫でる。

サンドラのまるで小さい子にするような撫で方に、

ハルは自身が何歳に思われているのか疑問に思ったのだが

嬉しそうなサンドラの顔を見てしまったら何も言えなかった。

ひとしきり、頭を満足するまで撫でた後

サンドラがハルに尋ねる。

「ハル？　なんで、君はドレスを着ないでズボンを着ているんだい？」

そう言うサンドラだってズボンをはいていたが、彼女と違って男装をしているわけではなさそうな

ハルの恰好が気になったようだ。

この世界の主流では女性はドレス、男性がズボンらしく

メイドの人たちもスカートだ。

「えつと、サ・お姉様だってズボンじゃないですか」

サンドラさん、と言いかけたハルはサンドラに視線だけで窘められ

る。

こんな風に目が物を言う所は、サンドラがジャヴと姉弟だと感じさせた。

ハルの聞き返しにサンドラは胸を張って言った。

「だって、こっちのほうが私に似合っているじゃないか！

やっぱり似合っているものを着たほうが美しさというものは引き立たされるだろう？」

確かに、サンドラは男装がよく似合っていた。

中性的な顔立ちと、細いが女性にしてはちょっとしつかりとした体形で

男物の服を着ると逆に女性っぽさが滲みでいて、妙な色気がある。「確かに、似合っています。」

えーと、私がズボンをはいているのは「私との約束があるからだ」ハルの言葉を遮って、声が響いた。いつの間にか部屋に入ってきたらしい。

よく知っている声にハルは振り向こうとしたが、それよりも早くサンドラの膝の上から持ち上げられる。

「ひゃあ！」

ジャヴに持ち上げられたというか、サンドラの腕からすっぽり抜かれたといったほうが正しいだろう。

そのまま、今度はジャヴに抱きあげられた。

この3日間で、ハルはジャヴに抱き上げられるのには慣れてしまっていた。

うら若き乙女としては、慣れてはいけなかったのだろうが

誰も見ていなくても恥ずかしいから降ろしてくれといくら彼に頼んでも無駄だったのだ。

もう2日目の夜あたりで諦めたので、抱き上げられるのは別にかまわなかったが、

いきなりは引っこ抜かれたのにはちょっと吃驚した。

「何をやっている？」

サンドラよりも少し深い紫の瞳が、ハルを覗き込む。

「サンドラさんとお話しをしていました。ジャヴは、もう少し仕事じゃなかったですか？」

たしか、4時に約束をしていたはずだったが、今は3時頃である。

3日ほどの付き合いだったが、時間には正確なジャヴだったからか、ハルは不思議そうに首を傾げた。

その問いかけに、ジャヴは軽く息をついた。

「・・・早く終わった。もう少ししたら始めるぞ、準備してこい」
ジャヴがすこしだけ言葉に詰まったことは気になったが、

ハルは早く始められることが嬉しくて頷いた。

用意するために降ろしてもらおうとして、固まっているサンドラが目に入る。

そう、彼女は完全に固まっていた。

驚きすぎて、言葉も何も出てこない。

あの、弟が自ら進んで女性に触っただけでなく、自然に抱き上げたのだ。

この間まで、寄ってくる女性は全て切りつける勢いで排除していた弟が

少女と約束して、抱き上げて、会話している。

夢じゃないだろうか。

頬を抓りたい衝動に駆られて思わず尋ねるように呟いてしまう。

「・・・ジャヴ。私は夢を見ているのかな？奇跡に近い光景を見ているのだが」

茫然とした姉の言葉にジャヴはそっけなく返した。

「とうとう幻覚か？」

頭がおかしくなったのかと、言外に言う弟に

サンドラはいつもと同じ弟だ、とほんの少しだけ安心した。

体を酷使している間だけは、不思議と楽に呼吸ができるような気がした。

自分の置かれた状況も。世界も、地位も関係ない。

見つめるのは相手の動き

動かすのは自分の手足

その時だけは、何も頭に浮かんでこない。

「はあ・・・うくつ・・・」

ハルの苦しそうな吐息だけが広い部屋の中に響く。

1時間の間に、幾度となく合わせた紫の眼からは冷静な色が消えていないというのに

ハルの頭は、動きすぎた疲労と酸欠のため冷静に何かを考えることができなかった。

体にも、腕にも力が入らなくなつて

とうとう、耐えきれなくなつてハルの膝がかり、と落ちる。

それでもその眼は必死にジャヴを睨みつけたまま。

一方、睨まれているはずのジャヴはハルと対照的に冷静そのものだった。

息も乱れていないし、いつもと変わらず余裕の表情で立っている。

体はもう限界だったけれど、それでもハルはジャヴから視線は外さなかった。

「ハル、・・・そんな眼で見られても男には煽っているようにしか見えない」

ハルの涙目で上目使いに見つめてくる様子に、ジャヴはちよつと唇の端を歪めて笑う。

そんな眼とは言うが、その原因はジャヴである。

悪役のようなジャヴの笑いに、悔しくなつたハルは氣力を振り絞つ

て立ちあがろうとした。

が、その瞬間にはハルの首にジャヴの剣があてられる。

「これで、10敗だな。これで今日は終わりだ。限界だろう？」

余裕の言葉とともに、首にあてられていた剣がジャヴの腰の鞘へと戻る。

悔しいが、何か言う気力もないハルは素直に肯いた。

手に持っていた剣を引きずるようにして鞘にもどすと、べたっと床に倒れるように寝転ぶ

ほてった体に、床の冷たさが心地いい。

体力の限界だった。

しばらくそうしていたかったが、なぜかジャヴの腕がのびてきてハルを抱き上げる。

「熱いです！」

お互い今まで運動していたのだから当然だ。

ハルの体はもちろんのこと、ジャヴの体もちょっと汗ばんでいる。

そんな状態で抱き上げられて熱くないはずがない。しかも、べたべたする。

文句を言ったハルに、ジャヴはしぶしぶといった態でハルを部屋に備え付けの簡易ベンチに座らせた。

軽く運動をするための部屋なので、布張りではなく木の簡素なものだ。

それでもいろんな模様が彫られ、深い艶が光るこれは安いものではないのだろう。

しかし、疲労には勝てない。遠慮なく、ぐったりと体をベンチに預けた。

そんなハル達にはちばちばち、と拍手をしながら部屋の隅にいたサンドラが近づいてきた。

「やあ！すごかったねえ！ 何時もあんなことをしているのかい！？ 弟の剣についていくのは大変だろう？ ましてやその小さい体でよ

くあんなに重たい剣を受け流せるものだ！！

ハル、君は剣に覚えがあるのかい」

2時間ほどジャヴとハルの剣の打ち合いを見ていたサンドラは、本気で驚いていた。

サンドラも多少剣を使えるが、

帝国騎士のトップを軽くあしらえるほどの弟の剣技には遠く及ばない。

2人が剣の打ち合いをはじめたときには、驚いた。

てつきり、お遊びのようなものを想像していたのに。

彼が少女相手にあまり手加減をしていないように見えたのにも驚いたが、

ハルが剣を上手く使っていることにも驚いたのだ。

小さくて可愛いハルが弟と2時間も剣を打ち合い、

流石に勝つことはなかったが、10敗しかしなかった。もちろん、

弟が手加減していたのはわかっていて。

体格の差を素早さで埋めるように隙を突くハルに対して、ジャヴは冷静にすべてを見切り受け流していた。

力の差から、ハルはあまり剣を打ち合うことをせず逃げているようにも感じられたが、

それでもジャヴの剣を受け止め、なおかつ弾いていたところもあった。

確かに二人の間には実力の差、経験の差は確実にある。

だが、信じられないことにジャヴが攻撃を受けそうになった場面も何度かあったのだ。

長い時間打ち合っていたため体力が限界に近づいているはずなのに、ハルは剣を合わせた瞬間に、合わさったところを支点にしてくるりと回りながら飛びあがった。

それでも並の運動神経ではできない。

とても驚いたが、それだけではなかった。

ハルはそのままジャヴの後ろ側に着地してから攻撃をするのかと思

いきや、

空中で体をひねりながらジャヴの頭めがけて剣を振りおろしたのだった。

瞬発力、体の柔らかさと判断力がそろっていないとできない攻撃だ。そもそも、そんな動きをする騎士は見たことがない。

まるで曲芸を見ているようだった。

とっさに体をひねって避けたジャヴだったが、よけきれなかったのか肩のあたりの服に剣先を食らっていた。

どこかの騎士団にでも所属していたのだろうか。

サンドラから見てもハルは剣の扱いに長けているようにみえたのだ。

人ではないといわれる竜の血を継ぎ、神に祝福された皇帝にも劣らないほどの運動能力。

正直に言えば、サンドラはハルを他の帝国の皇家の者かとも疑っていた。

サンドラの問いに、ハルはあいまいに頷く。

「まあ・・・、少しだけ」

ジャヴにもらうまで、ハルは今使っているような映画に出てきそうな剣は使ったことなど全くない。

使っていたのは主に木刀と、ナイフと包丁だ。

木刀は護身のためにと中学の時に入部した剣道部で。

ナイフと包丁はコンビ二強盗、銀行強盗、バスジャックなどでやむなく扱うことになったモノ達である。

人質になると、毎回といっていいほど首筋にナイフを当てられているので、

その特性や使い方を知らなくては対処できないだろうと祖母が護身に教えてくれたのだ。

サーカス出身の祖父母は、考えられない頻度で危険に遭遇するハルを心配し、鍛えてくれた。

才能があつたのか運動神経が良かったのかハルの刃物さばきはどんどん上達し、

ナイフ投げなら10m位離れていても、簡単に目標に当てる事ができるほどになった。

成長するにつれてその異常さがわかってきたのだが、小学生の時からありえないほどの頻度で人質にされるという、

不運なハルには、祖父母の教えてくれた技術は怪我をしないために、もつと言えば生き残るために必要だった。

さすがに小学生で腹筋が6つに割れそうになったときには祖父が嘆いたが、

時が経つにつれて筋肉はついていくはずなのになぜか目立たなくなっていた。

鍛えているのに外見の印象が幼いままであったため、幾つになっても人質にされることは多かったが、

自力で切り抜けるようになったのは不幸中の幸いだっただろうか。

そんな技術を身に付けたハルは、いつしか不幸少女という悲惨なあだ名をつけられてしまった。

中学では剣道部に入り、竹刀を持ち歩くようになってさえずうという目にあっていたからかもしれない。

高校では、帰宅時間が遅くなるために入部を断念したが。

最初は、剣道をしているという目印になり、武器とも呼べるものを持つていたら牽制になるという理由で始めた部活だった。

死活問題とも相まって、ハルはどんどん上達し3年になるころには部員達に負けることはなくなっていた。

大会などには、必ずと言っていいほど事故や事件で出られなくなっていたので、実力は判らないままである。

そんな風に過ごしてきた経験のためか、

この世界の剣も昨日、今日と慣れてきたらしく振り回せるようになってきていた。

曲芸のような動きが多いとは、剣道部の部員にも言われたことだ。防具をつけたまま、どうしてそんなに動けるのかとよく不思議がら

れたが

祖父母の特訓に比べたら動きやすい、としか言えなかった。

それに、重力の問題とかではないかと疑っているのだが

初日の勘違いではなかったようで、ここはとても体が動かしやすい。まだまだ、力も技もジャヴには全然及ばないが。もう少し鍛えたら、少しは見られるものになるだろうか。

「ちよっとつていうレベルじゃないだろう！君みたいな少女がこんなに剣を扱えるなんて！！」

弟にも負けてはいたけれど、十分剣で食べていける腕前だよ！」

興奮しながら言うサンドラに、ハルは褒められて嬉しくなったが

サンドラの言った「君みたいな少女」という言葉にちよっと引つかりを覚えた。

それが顔に出ていたのだろう、ジャヴがサンドラに向かって一言言った。

「16歳だ」

分かりやすいほどに、笑顔でサンドラが固まった。

たつぷり10秒は固まっていただろう。

サンドラはひきつった笑顔のまま、ギギ・と音がしそうなくらいぎこちない動作でジャヴの方へ体を向ける。

「・・・ハルが？・・・16歳？てつきり私は12歳くらいだと・・・」

ここまで驚いたサンドラは、そう本気で思っていたのだろう。

「1年が365日で1日は24時間の暦で16歳です！」

ハルはこのところ毎日繰り返している言葉を叫んだ。

年齢を言くと、暦の数え方が帝国間の標準のものではないのだろうと聞かれるのだ。

この区域の人たちに紹介されるたびにされる反応に、ハルは暦を読み上げた上で、自身の年齢を主張するようにしたのだった。

彫りの深い外人顔の人たちと比べてしまえば、12歳くらいに見られるのかと

日本に比べて、更に外見年齢が下がったことで悲しくなったハルに気がついたのか、サンドラがあわてて言う。

「いや、可愛らしいし、いいじゃないか！

・・・うーむ、最初は弟が幼女趣味にでもなったのかと思ったら、そういうことなんだね！」

幼女趣味やそういうことは、どういふことかハルにはわからなかったが

隣でジャヴは否定することなく頷いていた。何か二人の中に通じるものでもあったのだろうか。

「でも、なんだって、剣の稽古なんてしているんだい？　ハルが戦うわけでもあるまいし！」

サンドラの不思議そうな言葉に、ジャヴが答えを返す。

「ここ以外は城でも安全とは言い難い。

だから、自分の身を守るようになるまでこの区域から出させないようにしている」

そうなのだ。この世界でも、ハルに前と同じことが起こらないとは言い難い。

この世界では大丈夫だと思ったが。それでも、ハルは危険というものを知っている。自分で自分の身を守るようになったかった。

「護衛をつけばいいんじゃないかな？」

ハルの考えとは違い、サンドラは腕の立つ騎士を一人でもハルにつければ城の中なら大丈夫ではないかと提案した。

むしろ、サンドラとしてはハルの腕ならば護衛などほとんどいらな

いとさえ思ったのだ。

サンドラの提案にジャヴの顔がちよつとだけ固くなる。

「馬鹿貴族が何をしてくるか。護衛は付けるが、保険だ」
本当は、ハルの剣の腕を知って鍛えてみたくなつたのもある。
ジャヴだって、ただの少女であるハルが剣を扱えるとは思っていな

かった。

最初は、ハルに平和ボケしたところがあるので

本当に剣が危険なことを認識させるためだったのだが

二日のうちに、そんなことは関係なくなっていた。

ハルの腕なら騎士として十分通じる。

だが、ハルには剣を扱うことに対する注意というか危険度がしっかりと認識できていない気がするのだ。

ハルは日常が危険だとは思っていない。

剣を使えるという意味でも、それは試合や訓練での話だ。

実践というものを教え込まなければ、危険な考え方だった。

馬鹿な貴族にも、もうジャヴがそばにしている少女の情報は出回っている。

これで、ジャヴの女性に対しての気持ちが変わったと勘違いした貴族は絶対にいるであろう。

だから、邪魔だと考えられるハルを消しに来る可能性はものすごく高い。

いや、ハルが女神の御子だということを考えても殺すという手段ではなく、

誘拐や拉致監禁という手で来るかもしれない。

その時のためにもう少し、ハルに危機感を叩き込んでおかなければならなかったのだ。

「そうだね。馬鹿な貴族には困ったものだ。私はハルを気に入ったから、

夫と私の力で周りの貴族には脅しをかけておくよ。まあ、微々たるものにしかないかもしれないが」

「頼む」

サンドラは弟の言葉に一瞬息を飲んだ。

弟の頼むなんて言葉、いったいいつから聞いてないかわからないがとても信じられないことだ。

あの事件の後、ほとんど姉である自分さえ直視することはなかったのに。

今話している状態も奇跡に近いが、頼むという言葉が出るとは。

「弟よ！ 君は本当にいい人を手に入れたね！！」

サンドラは満面の笑顔でそう告げると、疲れたのか瞼が落ち始めているハルを起こさないように部屋を出て行った。

目を開くと、畳が目に入った。

あわてて身を起こすと、そこが自分の家だということに気がつく。

物の配置も、畳に映る影もいつもと変わらない。

いつもと変わらなかった。

矛盾を頭は訴えるのに体がついていかない。

今まで夢を見ていたんだろうか？リルヴァーナも、ジャヴもみんな夢であつたのだろうか。

だって、ほら祖母の呼ぶ声が聞こえる。

「・・・晴・・・晴つてば！どこにいたの？ 寝てたんだね？ 頬に畳の跡がついてるよ！

・・・もう、ばあちゃん達出かけるからね！ お母さんもすぐ帰ってくると思うけど、

それまで出かけるんじゃないよ！！」

ふすまが開いて、祖母が現れる。晴を見つけると腰に手を当てて言った。

なぜか、祖母は白いものが混じる髪をきれいにまとめて、余所行き

用の着物を着ている。

そうか、今日は祖父と祖母のデートの日だった。こういう時の祖母に逆らうと後が怖い。

あいまいな返事を返して、欠伸をした。

「晴？」

呼ばれたのは名前。

いつもの日常であるはずなのに、何故だろう、晴という呼ばれ方が懐かしく感じた。

考えていると、祖母は寝ぼけていると思ったのか晴の顔を覗き込んできくる。

「大丈夫かい？・・・ああ、ただ寝ぼけてるだけかい。若い娘が休日にデートの一つもしないなんて情けないねえ。

ま、ばあちゃん達はいつてくるから、後は頼んだよ？」

「うん、いつてらっしゃい」

晴の声と顔色に、祖母は心配ないと判断したのかそのまま、玄関のほうへと歩いていく。

デートと言ってもこんな田舎で何をしろというのだろうか。相手がいたとしても、ちょっとした繁華街に出るだけで公共交通を使用して片道2時間だ。せつかくの休日に疲れることはしたくない。

「そろそろいくぞ」

「はいはい。女の支度には時間がかかるんだよ」

祖父の祖母を呼ぶ声と、祖母の軽口が玄関へと消え、車の音が遠ざかってゆく。

今日は街へ映画とショッピングだと言っていた。帰ってくるのは夜だろう。

車だと電車より近くなるとはいえ、片道1時間はかかる。

家の中に人の気配が無くなった。ハルは起き上がって、体を伸ばす。ちゃぶ台に置いてあった小豆入りのお手玉を手にとって立ち上がり、縁側へと向かった。

庭の木々の緑が反射して目に眩しい。

緑の影にいる者たちは日差しには当たりたくないみたいだ。日陰の部分に蹲っていたのに、晴が庭に下りるとちよこちよこ出てくる。

ふわふわしたもの、子鬼のようなもの、鳥みたいなもの。

いつもの顔ぶれがハルの足の周りにまとわりつく。暇なら、遊べということだろう。

ここの異形の者たちは遊びが好きだ。

晴が持ってきたお手玉を投げるとうまくキャッチしてみんなで投げ合っている。

5個も同時に投げ合つと、誰に来るかわからないので結構難しいものなのだ。

1人に3個ぐらい一気に来た時にはいかにうまくキャッチするかがとても難しい。

段々と投げるスピードを速くしていくので晴も混じって、白熱した戦いになる。

これで日々反射神経を鍛えられているような気がする。

しばらく投げ合いが続いていたが、一匹が突然動きを止めた。

「帰ってきた」

そう言うが早く、それは素早い動きで緑の中に入っていつてしまった。

他の異形たちも、お手玉を晴に投げてよこすと次々に緑の中へと戻っていく。

ちょうど最後の一匹が戻ったところで、門のところに母親の姿が現れた。

いつも、彼らは晴の母親が来ると隠れてしまう。相性が悪いのかもしれない。

「晴。ただいま」

買い物袋を提げた母親が晴を見つけて笑顔になった。

おそらく、荷物を運ばせようというところだろう。

「一杯買っちゃった。重いよ、晴、運んでくれない？」

「ご褒美があるなら、頑張っちゃうよ？」

笑顔で言われては、やるほかないだろう。

駄賃代わりにおやつを要求すると、母親はしょうがないわねえと苦笑した。

「そう言うと思ったわ。葛饅頭買ってきたから、生もの冷蔵庫の中にしまったらおやつにしましょうか」

「やったあ！」

ご褒美という名のおやつがあるならば、やる気も出ようというものである。

晴は母親の持っていた買い物袋を受け取ると、台所へと軽い足取りで向かった。

冷蔵庫に、食材を入れようとしたところで、買い物袋の下の方に何か固いものが入っていることに気がつく。

「食べ物じゃない硬さだなあ。日用品かな？」

ちょっと気になったが、後で取り出せばいいやと、上のほうの食材から冷蔵庫に入れていく。

しばらく冷蔵庫と格闘していたら、母親が手を洗って戻ってきた。

「いっぱいあるでしょう？安かったから」

晴の後ろで母親が、大変だったわとつぶやく。確かに量が多い。

「言ってくれば荷物持ちに行つたのに」

「そうねえ、晴もこんなに大きくなったものねえ」

感慨深げに呟いた母親の一言が、晴の動きを止めた。

ガタッ

手の力も緩んでしまったようで、ハルは食材を取り落としてしまう。

慌てて拾おうとして、気が付いた。

なぜだかわからないが、拾おうとした指が震える。食材が拾えない。

気がつけば、寒くもないのに体が細かく震えていた。

「どうしたの？晴」

母親の柔らかい声が背中にかかる。

違和感が、急に湧き上がった。

「晴？」

心配そうな声だ。震えが止まらないハルを心配してくれているのだろっ。

こんなに心配されているのに、ハルには言葉を返すことができないか

った。

必死に、湧き上がってくる違和感と震えを意志の力で抑え込もうと片手で服の裾を握りこむ。

反対側の震えそうな手で、食材をつかみ冷蔵庫へ入れた。

「大丈夫だよ……。ちょっと……。寒かっただけ、冷蔵庫の前にいたから」

母親のほうを見ることができずに、晴は次の食材を取ろうと買い物袋の中に手を伸ばす。

さっきの固いものが手に当たる。

ハルがそれを取り出そうとしたら、母親の手がそれを抑えた。

「これは、いいのよ」

晴の手の中からそれを奪っていく。

ゆっくりと視線を向けたハルの目に映ったのは母親の手の中にあつた、荷造り用の麻紐だった。

「っ」

目を見開いた晴に、母親はするするとそれを引っ張り出していく。

動けないハルに、笑顔を見せながら

母親は無造作に麻紐を適当なところで喰いちぎった。

ブチンっと音がして、麻紐が切れる。

普通は切れるはずがない、ソレは本当に力任せに喰いちぎったのだろつ。

母親の口からは笑顔のまま、血が溢れ出していた。

真っ黒なその眼が、黒目が、吸い込まれそうなくらいに深い色を狂気を湛えていた。

口の端から血を流して、まるで歌っているような口調で彼女はハルに告げる。

「大きくなっちゃいけないでしょう？」

しゃべってはダメ。

だって、晴はずっと、あたしの中にいるんでしょう？」

そうしたら、きっとあの人も戻ってくるわ

そう呟いて

開いた唇から更に、血と、言葉があふれ出る。

ぼたぼたと台所の床に血がたれ、ありえない量の血だまりを作っていく。

不意に、母親の手が動いた。

それは本当に一瞬の出来事で。

どうやったのかわからないうちに晴の首には麻紐が巻かれていた。

思いつきり引つ張られて、晴の体が体勢を崩し台所の床に倒れこむ。

けれど首の力は緩まなかった。苦しさに紐を何とか外そうとするが、首に深く食い込んだ紐はどうやっても外れない。

「貴方は私の子供のまま、子供のままで、ナカにいるの、ねえ、
・
」

繰り返される呪いのような母親の言葉を聞きながら、体をばたつかせて

紐の間に指を入れようと必死で抵抗をする。

目がかすんで意識が落ちそうになったところで、突然に晴の首の苦しさが消えた。

静寂。

声も母親の気配も何もない。

恐る恐る目をあけても首の紐もない。

目に入るのは畳と、いつもの影だけだった。

キィ・・・

かすかな物音に上を向くと、

目に入っただのは欄間からぶら下がる物。

こぼれおちそうな目玉。

ありえないくらいに伸びた舌。

赤黒く変色した醜い顔。

排泄物の匂い。

欄間からぶら下がる母親に、晴は、絶叫した。

「つつ・・・」

飛び起きると、ハルはまず、周りを確認した。

天蓋付きの豪華なベットに、暗闇の中うつすらと見える部屋の様子。

ここは、ジャヴの部屋の隣にあるハルが借りている部屋だ。

それを認識して、やっと脳は活動を始めた。

全力疾走した後のように安定しない呼吸を、ゆっくりと整えた。

口の中は乾いているのに粘ついていて、とても気持ちが悪い。

夢だ、夢だ。と何度も心の中で繰り返すと、段々と冷静になってくる。

ハルは汗をかいている額を手で軽くぬぐうと、ベットを抜け出した。この夢を見たあとは、いつもこうなる。これ以上は、今日はもう眠れない。

悪夢は、元の世界に居た時からずっとハルを苦しめていた。二週間に一度は必ずこの夢をみる。

場所は変わっても、場面が変わっても、ハルの年齢や容姿が変わっても

それでも夢は必ず母の言葉と最後の姿を見せつけるのだ。母の最期を覚えていない自分を責めるように。

ハルはテーブルに置いてあった水差しを持ち上げて、コップの中に水を満たした。

気を落ち着けるために、コップの中の水を口に含む。

粘ついた口の中が水で潤されて

幾分か、気分がすっきりとしていく。

周りを見るとまだ、夜中のようにだった。外は真っ暗で、物音も聞けない。

ハルは静かに部屋を抜け出すと、庭へと続く廊下に出た。

この世界に来てから一週間たっただろうか。

夢をみる事が無くなって、ハルは本当に安心してた。

だがそれは、ジャヴとの稽古で疲れきって泥のように眠っていたのが原因だったらしい。

今夜夢を見たのは、ジャヴとの稽古に体力の余裕が見えてきたからであろう。

毎日、繰り返される剣の稽古にハルは信じられないくらい順応していた。

倒れてしまうまで体力を使うことが無くなって、

剣に加える力の使い方を覚えたといった方が正しいだろうか。

まだジャヴには勝てるなどとは冗談でも思えなかったのだけ。

そんなことを考えながら歩いていたら、運が良かったのか、

ハルは見回りをしているはずの騎士に出会わずに庭へ出ることができた。

庭に出ると、ハルは迷わずに整備された道を外れて緑の深いところへと進む。

広い庭は、小さいハルを隠してしまえるほど緑が溢れていた。

人の気配も遠く、薄く。

ハルが歩く音と葉を揺らす音、小さな生き物の立てる微かな音が耳を掠めていく。

どれだけの濃い闇であっても、夜の闇は怖くない。

何もかもを包み込んで、隠してしまう闇の中には怖いものなんて何一つない。

本当に恐ろしいのは、怖いのは自分を含めた——人だ。

緑の中に蹲る。

木や、緑の匂いに安心した。これは元の世界と変わらない。
でも、違うのだ。

自分自身が、他の人と違う。

経験も。

そしておそらく、能力も。

ここにきてから一週間。

たったの一週間だ。

けれども、ハルはここにものすごいスピードで馴染み始めていたし
身体能力は以前より上がった。

そう。

確実に、ハルの運動能力は上がっていた。

自分自身ですら、はつきりとわかるくらいに体が軽くなった。

世界そのものが違うのだから、前に考えたように重力などの関係で
そう感じているだけかもしれない。

けれど、一日経過することに

ジャヴのあんなに速かった動きも、何となく感じられるようになって
きている。

これはおかしいだろう。と頭の中の自分が叫ぶ。

今の状況は、ハルの中の恐怖を確実に助長している。

それを差し引いても、ハルは以前から自分自身が怖かった。

幼いころから人とは違う、この自分自身が。

他人には見えないものが見える目。

聞こえないものが聞こえる耳。

触れられる、人ではない体温。

そして、怯える母親。

何度も、事件に巻き込まれることで

周りは皆、ハルに対して不思議がっていた。

気味が悪いという人もいた。

けれども、ハルはあまり表だって人に嫌悪の感情を向けられた事がない。

それも、怖かった。

今は大丈夫でも、いつか恐怖の対象になってしまうことが。

ぼろりと疑問を口に出してしまえば、途端に人はハルを排除しようとするのではないだろうか。

母のように。

頭の片隅にこびりついて離れないその考えは

ふとした拍子にハルに牙をむく。

異形の、人とは違うモノたちに、

それは小さな神と呼ばれるものであり鬼のようなものであったのだけど。

ハルが不安を零すと、彼らは決まって笑ったものだった。

お前に害なすものなど、いないよ。と

みんなお前が大好きだと。傷つけるようなことはしないし、させない言葉を話せるモノは大抵そう言っただし、話せないモノたちは心配いらないとでも言うように

ハルの手を、指を握り笑っていたものだった。

もちろん、出会うすべてのモノがハルに友好的というわけではなかったけど。

日本には、多くの神がいるという。

田舎であつたからなのだろうか？確かに、キラキラしたモノは沢山いた。

神社などにも、道端にも、森にも。

けれど、リルヴァーナのようにあれほど強烈なモノは見たことがなかった。

凄すぎて怖かったのに、なぜか知らないけれど安心した。

何故、いつも安心するのは人ではないモノの傍なのだろう。
どうして、自分は人なのだろうか。

いつそ、人ではなかったならば
これほど悩むこともなかったのに。

沈み込んだまましばらく顔を上げずにいたら、
いつの間にか周りがぼんやりと明るくなっているのに気がつく。
顔をあげると、色のついたぼんやりとした光がまわりに漂っていた。
ぼんやりとした光に目を凝らすと、光の中に妖精のような姿の小さな者たちがいて。

「大丈夫？」

「くるしいの？」

「いたいなの？」

いろんな色の妖精のような者たちは口々にハルに聞いてくる。
ちよつと煩いが、心配してくれたのだろうか。

「大丈夫。怖い夢を見ただけですから」

正直に答えると、周りの者たちがもつと騒ぎ出した。

「それは災難ね！」

「かわいそうだわ」

「慰めてあげる！」

「そうね、私たち、慰めてあげるわ！」

「歌を歌いましょうか？」

「お話をしてあげましょう！」

「いえ、きれいなお花を見せてあげるわ！」

彼らは口々に色んなことを言ってくるが、その騒がしさが今はとてもありがたかった。

世界は違うのに、異形の者たちはどこでもハルに接してくれる。

その事が、とても嬉しい。

思わず涙が出そうになって、あわてて上を向くと、光の一つがびっくりにした声を上げた。

「まあ！貴女、女神さまの印をつけているのね！素敵だわ！！」

その声に、周りも女神さま！と口々に叫ぶ。

神官のグランが言っていた印だろうか。

わからないので口を開かなかったハルの前に、光たちがきれいに並んだ。

「女神の御子のお嬢さん。私たちあなたのこと気に入ったわ！

素敵なんですもの！！」

「困ったことがあったらいつでも呼んでね！」

「でも、ここじゃ私たちあんまり力を使えないわ。 竜がいるもの」

「そうね。 竜の気配があるから派手なこととはできないわ」

そう言っていると、並んだ光たちはふわふわと踊るようにハルの周りを漂いだす。

幻想的で美しい光の様子に、ハルは言葉もなく見入っていた。

しばらくすると、楽になった思考と

戻ってきた冷静さが視界の中に別のものを見つけた。

近寄っては来ていないが、周りのふわふわしたものに比べキラキラしいのでかなり目立っている。

なんとなく、ハルは彼女のような気がした。

「リルヴァーナ？」

キラキラした気配は、そこだけ明るくてとても目立つ。

案の定、前のような姿でリルヴァーナはハルの目の前に現れた。

容姿は母親とよく似ていたが、彼女の明るい雰囲気は違うものだと認識させてくれるには十分だ。

彼女はハルに、この前のように微笑みを向けた。

「ハル。こんばんは」

そう言って、近づいたリルヴァーナは優しくハルを抱きしめる。

草花の匂いとよく似た匂いと、人肌にとっても安心する。
安心したのに、涙が零れた。

「・・・あれ？」

ここで泣くようなことなんて一つもなかったはずだ。

なんだろうと、目をこするハルに、リルヴァーナは優しく笑った。
ハルが落ち着いてきたところで、リルヴァーナはゆっくりと腕を離れた。

見上げたリルヴァーナの顔は、少し厳しいものになっていた。

「ハル。ずっとこうやって、元の世界でも同じことをしていたの？」

リルヴァーナの問いに素直に頷く。

祖父母がいたころは、彼らの布団に潜り込めば安心した。
けれど彼らはもういない。

祖父母がいなくなってから、ハルを慰めてくれたのはいつも緑や、
異形の者たちだった。

そんなハルを見て、リルヴァーナは悲しそうに顔を顰め、
また厳しい顔に戻って言った。

「駄目よ。こんなことをしては。ハル、貴女は人間なのよ」

ハルは何のことを言われているのか解らなかった。

自分が人間だということは知っている。

「精霊たちは優しい？ 彼らの傍にいたい？ でも、ハルは人間なの」
の

さらに、リルヴァーナは続ける。

「神にも精霊にも馴染み過ぎてはいけないわ。それは人間である貴女自身を壊してしまう。

人間に、頼ることを覚えなさい。

人間を、信じなさい。

貴女は、人間でいたいのでしょう？」

リルヴァーナの言葉はどうしてかハルの胸に刺さる。

確かに、ハルは祖父母を失ってから、緑や異形の者たちに心を寄せ

ていた。

人間を信じられなかったからなのかどうかはわからないが、それは事実。

今まで、目をそむけていたことに突然光を当てられて、混乱はするが怒りはわからない。

悪いことだなんて思ってたなかった。

ましてやそれが、人間という自分自身を遠ざけているなんて。

「でも」

そうした行動で自分は、人間から逃げていたのだろうか。

思わず考えこんでしまったハルに、リルヴァーナは愛おしそうに微笑んで

ほら、と後ろを指さした。

「きっかけが、近づいているわよ。怖がってないで、ぶつかりなさい。」

「……大丈夫、同じ人間だもの」

そう言うのと笑んだままりルヴァーナはふっとかき消えた。

17 (前書き)

皇帝視点

何かに、呼ばれているような気がしてジャヴは目が覚めた。
ハルだろうか。

そう考えて、自分勝手に決め付けたジャヴはハルに何かあったのか
もしれないと考え

そばに置いておいた剣を持ち、隣の部屋へと向かう。

困ったことに、部屋の中に気配がない。

確認のため、一応ノックをしてからドアを開けると、やはりベット
の上にハルの姿はなかった。

ベットが乱れていないことから、自分で部屋を出て行ったのだろ
うと考えられる。

枕元にはハルに与えた剣がそのまま置いてあった。

ざわりと背筋を這い登った感覚に、不快感を覚えてジャヴはため息
をつく。

彼女はわかつているのだろうか。この城の中は決して安全ではない
ことを。

この区域の人間は信用のおける人物ばかりだが

右も左もわからぬ小娘が

夜中にひとりで出歩くななんてあつてはならないことだった。

しかも、ハルは武器を持っていない。

たった1週間で、

皇帝であるジャヴも驚くほどの才能を見せ、剣を使いこなせるよう
になってきたハルだが、

やはり、妙に危機感が薄いところがあった。

平和ボケをしているというか、警戒心は人一倍強いくせに彼女は危
機感が薄い。

この国で、いや、世界において、身を守る手段を持つということは
ある程度の年齢になれば自覚するものだ。

帝国の中にだつてほかに比べれば少ないものの犯罪は多い。

ハルの年齢である16歳ともなれば、

危険に近づかないことや身を守る手段を持つことは当たり前のこと。そうやって人々は生きていくのだ。

技術はあるのに、ハルにはそういった自覚が足りなかった。

そのくせ警戒心は強く、ほとんど嫌な顔を見せないところは自身の保身を考へてのことか。

無意識なのか、いきなりこれまでとは違う環境に置かれているはずなのに

無理をしていると感じさせないその姿勢は評価できる。

おかしな娘で、おかしな御子だった。

神の御子とは、神に愛でられた者をさす言葉だ。

何かに秀でていたり、神に気に入られることによって与えられる印。

印は通常、神官や魔術師などにしか見えない。

ジャヴだつてよく見れば見つけられるだろう。

印には神の力が宿り、御子はそれゆえに特殊な存在であつた。

神々の祝福を受けたものはそう多くはないが、各帝国に何人かは必ずいる。

筆頭が、皇帝だ。

皇帝は即位するときに必ず神の御子となる。

神に属する竜の子孫であり御子になるといふはつきりとした力を持つことで、

皇帝は巨大な帝国を治め、反乱させることなく統治するという仕組みだ。

実際に皇帝の力は権力の意味でも、純粋な力という意味でも絶大である。

それゆえに、時に諸刃の剣となるものでもあつた。

一人でも皇帝が、間違つた考へを持てば他の帝国や国、ましては世界にまで影響を及ぼしかねない。

まあ、そんな考えを持ったと知れたところで、神々に印と皇帝の座は取り上げられるだけだった。

御子というものは、通常は神が属する帝国内の人間を気に入ったときにするものだ。

今まで、神が遣わした御子などいなかったように思う。

珍しい、黒茶の瞳と髪を持った

16歳というには幼すぎる外見をもつ少女。

この御子が何を意味するのかわからないが

神が遣わした御子ということとは関係なく、ジャヴにはハルが必要だった。

この1週間というものの、ジャヴにとっては驚くことばかりだった。

触れても、抱き上げてても嫌悪感はない。

喋っていても、剣の稽古をしていてもきちんとジャヴに追いついてくる。

気がつけば、この状況に置かれた彼女の精神状態まで心配までしている有様だ。

初めは無意識のうちに起こしている行動が脳にも追いつかなかった。女に対してというか、これまで誰に対してもそんなことをした覚えはない。

ジャヴの皇帝という身分に対しての自制心はずっとこれまでそんなことを許さなかったのだ。

誰に対しても許すつもりもなかったものが。

それが、一人の少女に崩れかけている。

表面上は変わらずに過ごしていたが、ずっと彼は考えていた。

なんでこんなにも彼女を手元に置いておきたいのか、ということなのだ。

「やっぱり、一目惚れか」

ジャヴは呟いて、ハルの部屋を出る
ずっと考えていた答えは簡単で

2日前くらいに、これが一目惚れというのかと納得した。

女嫌いが一目惚れとは、世界も酷いものである。

ただ、ジャヴ自身は納得した時に妙にすっきりとした気分になったのだった。

そういえば、幼い頃にもこんな気持ちを感じたことがあったかもしれない。

ジャヴは、自身の長い髪をちらりとみて一人頷く。

もともと高い方ではないが自尊心が傷つくなんてこともなく、ハルへの思いを自覚した。

不思議な感覚だったが、不愉快ではなかった。

ただ、彼女を自分の物にしたいと思う。これを人は恋と呼んでいるのだろう。

初めて自覚した恋。

それだけに、ジャヴは部屋からいなくなったハルが心配だった。

この区域では襲われることはないかもしれないが、

夜中に少女の一人歩きは襲ってくれと言っているようなものだ。

舌打ちするとジャヴは歩き出した。

ガサリと草がかき分けられ
リルヴァーナが示した方向から、現れたのは寝ているはずのジャヴ
だった。

きっかけとは何だろうか

私は人を頼ってなかったんだろうか。

リルヴァーナの言葉が胸の中をぐるぐると回って落ち着かない。

何より、どうしてジャヴがここにいるのだろう。

「ジャ」

そう思ったハルが問いかけるより早く、これまでの経験からかハルの体が反応していた。

後ろに大きく飛んでそのまま距離を取る。

ザスッ

ハルがいた場所に鞘に入った剣がめり込んだ。

表情を変化させることなく、ジャヴはゆったりとした動作で剣を構えなおすと、

静かにハルに問いかけてきた。

「何で、夜中に一人でこんな所にいる」

ハルが思わず後ずさってしまうほど、わかりやすくジャヴは怒っていた。

心配して探しに来てみれば、ハルは一人で庭の中にいる。

しかも泣いていたようだった。

自身を心配させたことに対してなのか、彼女が一人で泣いていたことに対してなのか分からないが

ジャヴはハルに対して怒りを見せていた。

「こんな風に、誰かが襲ってきたかもしれない。何度も、1人で行動するなどと注意したはずだ」

言いながら間合いを詰めてハルに剣を振り下ろす。

今度の攻撃もなんとか避けたが、それを見た彼は振りおろした剣の軌道を変えてハルが避けた方向に薙ぎ払った。

ハルは予想していたのか剣の下を転がり抜けてジャヴの背後に回る。「何するんですか！あぶな」

講義をしようとして叫んだハルの足が、言い切る前にジャヴに払われた。

体勢を崩して、ハルは地面に尻餅をついてしまう。

「くっ」

体勢を立て直そうとしたところで、ジャヴの鞘付きの剣が首にあてられていた。

「ハル、お前は今丸腰だな」

そんな人間が一人で、出歩いているのは襲ってくださいと言っているようなものだ」

剣先をそれ以上動かすことなく、ジャヴは呟く。

呆然と見上げていたハルは、その眼が怒りだけではないものを含んでいるのに気がついた。

今のジャヴの言葉で、きっと彼が心配してくれていたということも理解できる。

だが、なぜジャヴがこんなことをしたのか分からなかった。

わざわざ、攻撃を仕掛けなくても口でいえば済むことではないか。

「口で言うよりも早いだろう。不逞の輩は言葉をかけたりなんかしないぞ」

ハルの疑問が顔に出ていたのか、ジャヴが剣を腰に戻しながら言った。

その言葉にハルの中の何かが切れた。
立ち上がって、彼の服を掴んで引つ張る。

「今の不逞の輩はジャヴです！なんなんですか！いきなり！！」

確かに、ハルは浅慮だったかも知れないが

鞘付きの剣とはいえ、いきなり切りかかることはないではないか。
当たっていたら、間違いなく骨が折れていそうだ。

「口で言うてください！ジャヴのバカ！！」

怒鳴りながら、ハルは服を掴んだままジャヴの胸を叩いた。

ジャヴがきたとき、ほんの少し

ちよつとだけ安心した気持ちがあったというのに。

すでに、ハルの中からその時の気持ちは吹っ飛んでいた。

ジャヴの攻撃に、行動に怒りがこみ上げてきて、そのせいか目の前
が霞んでいく。

「ちよつと夜風にあたりたかったただけなのに！なんで切りかかれ
なくちゃならないんですか！」

敬語も少し崩れてしまった。

叫んだハルに対して、ジャヴは冷静だった。

淡々と言葉を返してくる。

「1人で泣くためにか」

「違う！」

「1人になりたかったんじゃないのか」

「1人になりたかったわけじゃない！だって、ジャヴだって皆だ
って寝てたじゃないですか！

起こしたら迷惑でしょう！？」

「だから、庭に出たのか」

なんとなく彼の性質の悪い誘導に引つかかっていることは分かった
のだが、

言葉は止められない。

「悪いですか！？」

「悪い。だから、泣くな」

「泣いてないです!!」

「わかったから、泣くな」

焦ったようなジャヴの言葉に、ハルはいつの間にか自身の頬に再び涙が流れていることに気がついた。

怒りで目が霞んでいたんじゃないかと

涙が流れていたのか。

ハルは掴んでいた手を離し、乱暴な仕草で涙をぬぐった。けれど、拭いても拭いても目からはどんどん涙が零れ落ちてくる。

何とか止めようと顔を拭い続けると、ジャヴの手がそっとそれを止めた。

いつものように抱き上げられるのではなくて、ぎゅっと強い力で抱きしめられる。

息苦しいのに、怒っていたはずなのに

ジャヴの体温と背中をなでる手が心地よかった。

ハルは、ジャヴにしがみついて泣いた。

怒りと悔しさ、安心した気持ちも混ざってぐちゃぐちゃだった。

この世界に来てから、混乱することや泣くことがとても多い。

特に、人の前で泣いたのは何年振りだろう。

祖父母が死んでから、なかったような気がする。

泣きながら、そんなことを考えていたら

ハルを抱きしめたまま、ジャヴが言った。

「お前が何を考えているのか知らないが、勝手にいなくなるほうが迷惑だ。」

1人で泣くな。1人が嫌なら傍にいる」
言葉はすとな、とハルの中に落ちてきた。

でも、そんな言葉は信用できない。

「嘘、つき・・・」

「嘘じゃない」

「だって、おじいちゃんも・・・おばあちゃんもそう言ってたけどすぐに居なくなっちゃいました」

「そうか」

「いなくなるんなら、そんな・・・約束しないでくださいだから、だって・・・」

「何を怖がっている」

「う・・・」

「言え」

「・・・げ、現実味がなさ過ぎて・・・怖いんです。

こんな、優しくしてもらって、あんなに動いて・・・」

「現実じゃないと？」

どうしてだろう、ハルを抱きしめている彼の腕の力が強くなった気がした。

「だ、だって・・・」

「お前は、ここにいるだろう」

「私は」

本当に、ここに存在しているのだろうか。

「いても、いいんですか・・・？」

「傍にいる。現実の区別がなくなったら、いつでも斬りかかってやる」

「・・・それはやめてください」

「そうか」

ハルが顔をあげてうん、と涙声で何度も呟くと、ジャヴは安心したように微笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5255z/>

世界に嫌われた女の子

2011年12月25日15時46分発行